

鹿児島大学共同獣医学部共同獣医学科・山口大学共同獣医学部共同獣医学科
に対する評価結果

I 判定

2025年度獣医学教育評価の結果、鹿児島大学共同獣医学部共同獣医学科（学士課程）及び山口大学共同獣医学部共同獣医学科（学士課程）は本協会の獣医学教育に関する基準に適合していると認定する。

認定の期間は、2026年4月1日から2033年3月31日までとする。

II 総評

鹿児島大学共同獣医学部共同獣医学科（学士課程）及び山口大学共同獣医学部共同獣医学科（学士課程）は、各大学独自の教育理念・教育目標に基づき、「生命科学の中核をなす動物生命科学研究を推進し、人類と動物との共生環境社会を科学的に考究し、動物生命倫理を通じて命の尊厳を学び、豊かな人間地球社会の創生に貢献する」ことを教育（基本）理念としている。この教育（基本）理念のもとで、「国際水準の獣医学教育を体系的に創出・実践するとともに、学際協力により深い知識と高度な技術を備えた専門性の高い獣医師を養成し、幅広い見識と倫理観をもって人間社会の質的向上に貢献できる能力を培い、問題解決能力と自己資質を向上させる能力を涵養することで、地域に根ざすとともに、社会のニーズに対応した、人間地球社会を俯瞰できる人材を輩出する」ことを教育目標とし、国際水準を基準とした2大学による共同の教育体制を独自に構築している。

この教育目標を達成するために、教育課程においては、獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに基づき、導入科目、基礎獣医系科目、応用獣医系科目、臨床獣医系科目を齊一教育科目として体系的に配置している。また、獣医師としての資質を涵養するために、アドバンスト科目として、「卒業論文」を必修の専修教育科目として開講している。このほかに、動物診療や衛生検査等の実習を通じて獣医師の社会的責務を体得させるために、実地研修（インターンシップ）を国内外の多様な施設で実施している。

とりわけ、鹿児島大学において、「Day-One-Skills：獣医師として社会に出る1日目に身につけておくべき必要最低限の技術スキル」を設定し、その結果を可視化しているほか、新設した「総合臨床アドバンス実習」を通じて専門性の高い臨床教育の充実を図っていることは、学生の臨床能力の担保及び向上につながる取組みとして優れている。また、欧州獣医学教育機関協会（以下「EA EVE」という。）の認証取得の過程から、クリニカルローテーションによる犬・猫・牛・馬と獣医療が対象とする全動物種に対して少人数によるハンズオン実習を、豚・鶏・水産動物・展示動物についても産学官連携による少人数現

地実習を実現している。更に公務員獣医師としての業務も家畜保健衛生所や食肉衛生検査所における滞在型現地実習において、いずれも齊一教育科目として履修させるカリキュラムを実現している点は長所として高く評価できる。さらに、「SKLVセンター」を設置し、産業動物臨床獣医学と動物衛生学を中心とした、産業動物獣医学の教育研究の更なる強化に取り組んでいることも高く評価できる。

当該獣医学教育課程の特色としては、参加型臨床実習において、伴侶動物、産業動物共に十分な数の症例を診察し、学生1人あたりの症例数が適正な割合を大きく上回っていることが挙げられる。また、民間農場を活用した豚や鶏の参加型臨床実習や病理解剖実習をローテーションに加え、産業動物から伴侶動物に及ぶ多様な動物種の病理解剖実習を少人数制で実施しており、充実した参加型臨床実習が提供されていることを示すものとして評価できる。

附属獣医学教育病院の施設・設備に関しては、鹿児島大学において、伴侶動物、牛及び馬それぞれに対する専門の診療施設を設けるとともに、夜間救急診療に対する実習体制を整備している点が評価できる。また、両大学とも海外研修や国際交流に力を入れており、国際水準の教養を備えた獣医師を養成するための環境整備を行っている。このほかに、EAEEVの認証を取得・維持するとともに、その過程で教育の自己点検・評価に学生参画を強化している点も評価できる。

一方で、以下の点は前回の評価結果でも指摘されており、課題が見受けられる。

まず、実習の指導体制について、両大学共に1学年30名程度の学生を対象とした実習において、教員とティーチング・アシスタント（以下「TA」という。）合わせた複数名による指導体制がとられていない科目があり、教育の水準を向上させるためにも、今後適正な人数の指導体制で実施されることが望まれる。さらに、両大学とも若手教員の積極的な採用や女性・外国人教員の比率向上にも取り組んでおり、持続可能性や多様性の確保に努めているが、女性教員比率の増加については改善の余地があると考えられる。

これらの点を改善するためにも、今回の獣医学教育評価の結果を活用し、改善に向けて今後も継続して自己点検・評価活動に取り組み、獣医学教育（学士課程）の質のより一層の保証・向上を図ることが望まれる。また、大学間の連携を一層深め、共同獣医学部共同獣医学科としての長所・特色を伸展させることを期待したい。

III 獣医学教育に関する基準の各項目における概評及び提言

1 使命・目的

<概 評>

【項目：使命・目的】

共通

当該獣医学教育課程では、それぞれの大学独自の教育理念・教育目標に基づき、「生

命科学の中核をなす動物生命科学研究を推進し、人類と動物との共生環境社会を科学的に考究し、動物生命倫理を通じて命の尊厳を学び、豊かな人間地球社会の創生に貢献する」ことを教育（基本）理念としている。この教育（基本）理念のもとで、「国際水準の獣医学教育を体系的に創出・実践するとともに、学際協力により深い知識と高度な技術を備えた専門性の高い獣医師を養成し、幅広い見識と倫理観をもって人間社会の質的向上に貢献できる能力を培い、問題解決能力と自己資質を向上させる能力を涵養することで、地域に根ざすとともに、社会のニーズに対応した、人間地球社会を俯瞰できる人材を輩出する」ことを教育目標として掲げ、国際水準を基準とした2大学による共同の教育体制を独自に構築し、高度な人材を育成・輩出することを目指している（評価の視点 1-1）。

これらの理念及び目標は、各大学の履修の手引きやウェブサイト等を通じて教職員や学生に周知し、社会一般に公表している。新入生に対しては、両大学合同のガイダンスや各大学で実施するオリエンテーションにおいて説明を行い、入学希望者に対しては、各大学においてガイドブックや大学案内を通じて情報提供を行っており、周知・公表方法について適切と判断できる。一方で、両大学とも周知活動の効果の把握を現状は行っていない。今後、教職員や学生に対してアンケート調査を行う予定であり、周知活動の効果の検証を確実に実施することが必要である（評価の視点 1-2）。

鹿児島大学

鹿児島大学は、進取の気風にあふれる総合大学として、学生の潜在能力の発見と適性の開花に努め、自主自律と進取の精神を有する人材の育成を目指すことを教育理念とし、教育目標として、「1. 幅広い教養と高度な専門的知識・技能を身につけ、諸課題を発見・探究・解決する能力を育む」「2. 豊かな人間性と倫理観を身につけ、向上心をもって自ら困難に立ちむかう態度を養う」「3. 地域における活動に積極的に関わり、社会の発展に貢献できる行動力を養う」「4. グローバルな視野をもち、国際社会の発展に貢献できる実践的な能力を育む」の4つを掲げている。

上記の共同獣医学部共同獣医学科の教育（基本）理念・教育目標は、この大学の理念・目標を適切に定めたものとなっている（評価の視点 1-1）。

当該獣医学教育課程の教育（基本）理念・教育目標については、「鹿児島大学共同獣医学部概要」及び「共同獣医学部履修の手引き」に掲載し、全教職員に配付して周知を行っている。新入生に対しては、鹿児島大学で開催される「新入生オリエンテーション」において「履修の手引き」を配付し、学部教務委員長が説明を行っている。入学希望者や社会に対しては、「鹿児島大学受験生のための大学案内」や共同獣医学科ウェブサイトを通じて広報している（評価の視点 1-2）。

山口大学

鹿児島大学共同獣医学部共同獣医学科・山口大学共同獣医学部共同獣医学科

山口大学は、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」を理念とし、「地域の基幹総合大学及び世界に開かれた教育研究機関として、たゆまぬ研究及び社会活動並びにそれらの成果に立脚した教育を実践し、地域に生き、世界に羽ばたく人材を育成する」ことを目的としている。大学の理念、目的を踏まえ、上記の共同獣医学部共同獣医学科の教育（基本）理念・教育目標を適切に定めている（評価の視点 1-1）。

当該獣医学教育課程の教育（基本）理念及び教育目標については、毎年度教職員及び学生に配付する「山口大学共同獣医学部履修の手引」や共同獣医学部ウェブサイトで公表し、新入生を対象として4月に開催している「2大学合同ガイダンス」においても説明している。入学希望者や社会に対しては、入学者選抜要項や山口大学大学案内及び共同獣医学部ガイドブックに記載し広く公表している（評価の視点 1-2）。

2 教育の内容・方法・成果

<概 評>

【項目：学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針】

共通

当該獣医学教育課程の教育目標に基づき、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）及びこれを踏まえた教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を策定している（評価の視点 2-1）。

これらの方針は、両大学の履修の手引きやウェブサイト等を通じて広く公表されている（評価の視点 2-2）。

鹿児島大学

鹿児島大学では、学位授与方針において、修得すべき知識・技能・態度を「豊かな人間性と獣医師として正しい倫理観を持ち、行動規範に従い職務を遂行できる能力」「獣医学を基礎とした動物生命科学研究を実践するための探究心を持ち、社会の中で協力し、問題解決できる能力」「人や動物の感染症に関する基礎知識を持ち、その制圧に寄与できる能力」「高度な動物医療に関する基礎知識を持ち、適切に実践できる能力」「畜産資源に関する基礎知識を持ち、その安定供給と安全性確保に資する能力」「国際社会と地域社会に貢献できる能力」と明確に示している。

また、学位授与方針を踏まえ、教育課程の編成・実施方針を掲げており、教育課程の編成にあたっては、①豊かな人間性及び生命倫理と動物福祉に関する知識を身につけるために、一般教養教育科目、初期教育科目を配置し、齊一教育科目（必修科目）に基礎教育科目、導入科目を配置すること、②動物の構造と生理機能についての基礎知識、生体に作用する化学物質とその作用機構についての基礎知識及び動物生命科学研究を行うための技術を身につけるために、齊一教育科目に基礎獣医系科目を配置すること、③病気による動物体の変化、病原体の構造と病原性、感染症の予防と制圧に関する知識と技術を身につけるために、齊一教育科目にそれらに応じた応用獣医系科目を配置すること、④伴侶動物の病気とその予防・診断・治療の知識と技術を身につけるために、齊一教育科目にそれらに応じた臨床獣医系科目を配置すること、⑤畜産資源である産業動物の病気とその予防・診断・治療、生産性向上と食の安全についての知識と技術を身につけるために、齊一教育科目にそれらに応じた応用獣医系科目と臨床獣医系科目を配置すること、⑥獣医学の高度な知識と国際社会及び地域社会に貢献できる能力を身につけるために、一般教養教育科目、外国語科目、アドバンス教育としての専修教育科目（専攻演習及び卒業論文）及び自由科目を配置することの6点を明示している。さらに、教育の実施にあたっては各科目の目的・目標に応じた方法をとることに加えて、各科目の教育・学習目標及び評価基準を明確に示し、厳格な成績評価を行うことを明記している（評価の視点 2-1）。

周知の効果については教授会や「学生協議会」を通じたアンケート調査により把握する予定であり、これを確実に実施することが望まれる（評価の視点 2-2）。

山口大学

山口大学の学位授与方針では、修得すべき知識・技能・態度として「豊かな人間性と獣医師として正しい倫理観を持ち、行動規範に従い職務を遂行する能力」「獣医学を基礎とした動物生命科学研究を実践するための探究心を持ち、問題解決を行う能力」「動物感染症に関する基礎知識を持ち、その制圧に寄与する能力」「高度な動物医療に関する基礎知識を持ち、適切に実践する能力」「畜産資源に関する基礎知識を持ち、その安定供給と安全性確保に資する能力」「国際社会と地域社会に貢献できる能力」が明確に示されている。

また、教育課程の編成・実施方針として、①生命倫理と獣医倫理に関する知識を身につけるために、斉一教育科目に導入科目を配置すること、②動物体の構造と生理機能、生体に作用する化学物質と作用機構についての基礎知識と動物生命科学研究を行うための技術を身につけるために、斉一教育科目に基礎獣医系科目を配置すること、③病気による動物体の変化、病原体の構造と病原性、感染症の予防と制圧に関する知識と技術を身につけるために、斉一教育科目に応用獣医系科目を配置すること、④伴侶動物の病気とその予防・診断・治療の知識と技術を身につけるために、斉一教育科目に臨床獣医系科目を配置すること、⑤産業動物の病気とその予防・診断・治療、生産性向上と食の安全についての知識と技術を身につけるために、斉一教育科目に臨床獣医系科目を配置すること、⑥獣医学の高度な知識と国際社会及び地域社会に貢献できる能力を身につけるために、アドバンス教育としての専修教育科目を配置することの6点を定めている。これらは、学位授与方針を踏まえた内容となっている（評価の視点 2-1）。

周知の効果については、学生に対しては「学修実態に関するアンケート（在学生調査）」により検証している。ただし、回答率が13.5%と低く、有意義な検証とはいいがたいため、今後、回答者の増加に努める必要がある。教職員に対しては、アンケート調査により把握する予定としており、確実な実施が望まれる。また、入学（入口）から卒業（出口）まで学びの一貫性をもたせるために方針を見直しており、2025年度から新たな学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を適用している（評価の視点 2-2）。

【項目：教育課程の編成】

共通

獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに基づき、導入科目、基礎獣医系科目、応用獣医系科目、臨床獣医系科目を斉一教育科目として体系的に配置している。講義と

それに関連する実習が有機的に連動するよう、カリキュラム編成の段階から時間割を作成している。学生の獣医師としてのキャリアパスを意識した科目として、獣医師の社会的役割や責務について学ぶ「獣医学概論A・B」を1年次に、さまざまな職域で活躍する学外の現役獣医師が講師となり、獣医師が活躍する多様な分野について見識を深めさせる「獣医キャリア形成論」を3年次に設定している。アドバンスト科目は各大学で開設しているが、海外の外国人教員による「獣医国際感染症学」及び「熱帯獣医学」は、山口大学から鹿児島大学に配信しており、グローバルな獣医学を学ぶ講義となっている。

また、獣医師としての資質を涵養するために、「卒業論文」を必修の専修教育科目として開講しており、卒業論文発表会での発表を課している。このほかに、動物診療や衛生検査等の実習を通じて獣医師の社会的責務を体得させるために、実地研修（インターンシップ）を国内外の多様な施設で実施している（評価の視点2-3）。

鹿児島大学

鹿児島大学では、選択自由のアドバンスト科目として、「伴侶動物総合臨床アドバンス実習A」（伴侶動物内科診療）、「伴侶動物総合臨床アドバンス実習B」（伴侶動物外科診療）、「産業動物総合臨床アドバンス実習A」（牛診療）、「産業動物総合臨床アドバンス実習B」（馬診療）を配置し、高度な臨床知識と技術の修得を目的として、単一診療科における参加型臨床実習を実施している。このほかにも、研究活動に必要な知識・スキルの修得を目的とした「先端獣医学特別研究」を6年次に配置している。さらに、大学院共同獣医学研究科への進学を希望する学生が、同研究科の「共同獣医学特別講義」を先取りの形で受講し、大学院の単位を前倒しで取得できるようにしており、学生の獣医師としての多様なキャリアパスを意識した教育課程となっている。

4年次には必修の専修教育科目として4つの講座（基礎獣医学、病態予防獣医学、伴侶動物臨床獣医学、産業動物臨床獣医学）による「専攻演習」を配置し、異なる講座の「専攻演習」を履修することにより各講座における専門的な研究内容について学ぶ機会を与えている。さらに、研究活動に興味のある2年次以降の学生を対象に、自由選択科目として「獣医学研究基礎実習A～D」を配置し、興味のある研究活動への参加を通じて、リサーチマインドの育成にも配慮した教育を行っている。

獣医師の社会的責務の体感を目的として、応用獣医系科目の「食肉衛生検査学実習」において畜肉衛生検査業務全般を、「動物感染症総合実習B」において家畜保健衛生業務全般を学ぶ実地研修（インターンシップ）を課している。また、臨床獣医系科目においても、「産業動物総合臨床実習」では豚・家禽・牛の診療業務全般を、「伴侶動物総合臨床実習」では動物園動物・水族館動物の診療業務全般を学ぶ実地研修（インターンシップ）を課している。特に魚肉衛生検査業務や水族館動物診療に関しては、鹿児島大学の地域性を生かした内容となっている。

このほか、E A E V E 認証校における海外実地研修「国際獣医学インターンシップ（国際獣医学研修）」及び国内企業・自治体・農場等における実地研修「獣医師スキルインターンシップ」が自由科目（卒業要件外科目）として開講され、実地教育の充実に努めている（評価の視点 2-3）。

山口大学

山口大学では、アドバンスト科目として、5～6年次に「先進基礎獣医学演習」「先進応用獣医学演習」「先進臨床獣医学演習」及び「アドバンス実習A～C」を開講し、研究室の活動又は分野を横断した実践的な実習を通じて、多角的な視野、理解力、洞察力、技術を養い、地域社会等に貢献でき、即戦力となる人材の育成に取り組んでいる。「先進基礎獣医学演習」「先進応用獣医学演習」「先進臨床獣医学演習」はリサーチマインドの育成にも配慮した教育となっている。

また、高度な情報処理技術の修得を目的に、2年次後期以降にデータサイエンス科目を、4年次前期以降にバイオ情報処理技術科目を設置している。

卒業論文の履修に向けては、4年次に「専攻演習」を課しており、所属する研究室にて専門分野の研究内容の学修を演習形式で行っている。

獣医師の社会的責務の体感を目的として、専門教育科目の「獣医学公衆衛生学実習Ⅰ」「獣医学公衆衛生学実習Ⅱ」「食肉衛生検査学実習」「伴侶動物総合臨床実習」「産業動物総合臨床実習」、自由科目の「獣医学特別研修」「国際獣医学特別研修」において実地研修（インターンシップ）を課している。実習先に関しても、家畜保健衛生所、食肉衛生検査所、畜産試験場、動物園、一般動物診療施設など、さまざまな実習先が用意されている。また、学生が国内外でインターンシップを行った場合にも単位化を認めており、充実した実地教育を行っている（評価の視点 2-3）。

【項目：教育の実施】

共通

当該獣医学教育課程では、基礎・応用・臨床獣医系科目で講義や実習を、専修教育科目で実験や演習を行っている。卒業論文を含む研究活動の成果は、学会や学術論文として発表する機会を与えている。

両大学間を結ぶ講義は、遠隔講義システムを用いており、開講される全ての講義科目を収録し、病欠による再受講、定期テストや国家試験前の振り返り等のために、学内に設置された自習室のパソコンを使ってオンデマンドで視聴することができるようにしている。遠隔地にいる兼任教員が授業を行う場合も、本遠隔授業システムに接続して、授業配信（講義のみならず、演習や実習での利用も可）を行うことができるようになっている。遠隔講義システムを含む授業方法の工夫については、授業評価アンケートによって学生からの意見を聴き取り、また、教員による授業参観を行い、毎

年の教育改善に生かしている。

当該獣医学教育課程では、LMS (Learning Management System) として「Glexa」を共同で運用しており、両大学間で一貫性のある学習環境を提供している。具体的には、講義前に資料を配付し予習を促すとともに、学習課題や予習指示を提示することで、学生が能動的に学習に取り組めるよう工夫し、学生が自身の理解度や課題を客観的に把握できるようにしている。なお、共同獣医学課程における学生の移動型教育は、現在、費用や日程調整の問題で中止している。移動型教育に代わる遠隔授業システムの充実に取り組むとともに、効果的な移動型教育の実施について検討を始めている（評価の視点 2-4）。

実習は教員の監督・指導のもと適正に行われているが、一部の实習科目は教員1名（TAを含む）で担当している。前回の評価結果でも指摘しているが、教員配置人数の適正性を再確認するとともに、スチューデント・アシスタント（以下「SA」という。）の配置を検討することが望まれる（評価の視点 2-5）。

解剖学教育及び病理学教育に関して、解剖学教育では、両大学共に代替法を利用した効果的な授業形態をとっている（評価の視点 2-6）。

カリキュラムは体系的に構成され、カリキュラム・マップを通じて学生に周知されている（評価の視点 2-7）。

また、授業の時間割やシラバスは詳細に作成・点検され、学生に提供されている（評価の視点 2-8）。

鹿児島大学

授業の方法に関して、実際の臨床現場でのクライアントへの対面対応やカウンセリングといった、ロールプレイを採り入れたアクティブラーニング講義を「動物行動学」「生命倫理学」「動物遺伝学」「コミュニケーション論」で、臨床現場におけるアクティブラーニング講義を参加型臨床実習（臨床獣医学と衛生学分野の体験型学習）で行っている。また、海外での参加型臨床実習、県内の機関や企業の協力による実地実習等、多彩な教育方法を採用している。これらのアクティブラーニング講義や実習は、ケーススタディを土台として学生自身がストーリーを構築して回答を導く必要があるため、問題基盤型学習（PBL）としても活用されている。このほかにも、3年次前期に配置している「獣医臨床基礎実習」は、共同獣医学部附属の「入来牧場」で行う前臨床科目であり、貴重な滞在型体験実習を採り入れている。

「卒業論文」においては、成績（GPA）を基準に、学部常勤教員（原則、基幹教員）を卒論指導教員として配置している。

インターンシップ科目としては、1～6年次まで履修が可能な「獣医師スキル研修」や「国際獣医学研修（国際獣医学インターンシップ）」を選択科目として、5年次には、食肉衛生検査所（と畜場）、家畜保健所、NOSA Iでの実習を必修科目（「食肉

衛生検査学実習」「動物感染症総合実習B」「産業動物総合臨床実習」)として開講し、公衆衛生学分野や産業動物臨床獣医学分野を体験する貴重な機会を提供している。

海外派遣に関しては、現在、8か国10機関と部局間国際学術交流協定を締結し、5年次の参加型臨床実習及び6年次の「国際獣医学研修」(アドバンス臨床実習)において、毎年3～5名の学生を対象に、1か月程度EAEVE認証校であるフランスのヴェットアグロスープ(フランス獣医学農学高等教育学校:リヨン獣医大学)及びアルフォー獣医大学での臨床教育に参加する機会を提供している。他の協定締結大学からは留学生を受け入れており、欧米及びアジア諸国の学生と相互に情報交換する機会を設け、国際感覚と社会的教養を備え、海外でも活躍できる獣医師の育成を目指した教育方法を構築している(評価の視点2-4)。

実習の指導体制について、鹿児島大学では、2024年12月現在、基礎獣医学講座(8名)、病態予防獣医学講座(7名)、臨床獣医学講座(6名)及び附属施設(病院10名、附属越境性動物疾病制御研究センター(TADセンター)5名、教育改革室1名)に計37名の基幹教員を、附属施設(共同獣医学研究科1名、動物病院4名、学部附属南九州畜産獣医学教育研究センター(SKLVセンター)5名)に10名の特任教員を配置し、合計47名の常勤教員が担当している。TAは大学院学生20名前後を配置しているが、SA制度は設けられていない。「伴侶動物総合臨床実習」では、常勤教員とTA合わせて23名の指導体制をとり、少人数制の教育体制を整えている(評価の視点2-5)。

動物死体を活用した解剖学教育では、受講生1人あたりの使用動物数は産業動物で0.11頭、伴侶動物で0.32頭、鳥類で0.24羽であり、適正な割合であるといえる。動物種においても、牛、馬、豚、鶏、犬と全ての動物種について解剖学実習を実施している。また、「3D解剖アトラスIBALA LEARN」を用いた代替法を導入し、実物では構造上観察しづらい部位の確認や、離断し不可逆的に観察できなくなった部位の学習効果を高め、実習時間を短縮してもこれまで通りの学習効果が維持できるよう工夫している。動物死体を活用した病理学教育についても、受講生1人あたりの使用動物数は産業動物で0.99頭、伴侶動物で0.88頭、鳥類が1.20羽であり、適正な割合であるといえる。動物種においても、牛、馬、豚、鶏、犬、猫と全ての動物種について病理学実習を実施している。5年次の参加型臨床実習においては、病理学コースを組み込み、病理解剖症例に学生が随時参加できる教育体制を整えている。なお、病理学教育において代替法は導入していない(評価の視点2-6)。

授業科目を体系的に履修できるように、入学時のみでなく、各年次においても継続的な履修指導を適切に行っている。当該大学では、特徴的な教育の一環として自由科目を設けているが、全学的な指針によりカリキュラム・マップへの記載を行っていない。一方で、学習成果の可視化を目的とした「ディプロマ・サプリメント」を導入し、現在、その内容の充実を図っている。学生が自由科目の目的や履修の意義を理解する

ために、自由科目を含めた「ディプロマ・サプリメント」の活用が期待される（評価の視点 2-7）。

授業時間割は2大学間で共有され、6年間の履修計画と共に「履修の手引き」で明示している。時間割は、1年ごとに計画変更等の見直しを行い、決定内容を学生及び教職員に周知している。また、シラバスには、授業の概要、学修目標、授業計画等を明示しており、全学共通のシラバスシステムを通じて学生に配信している。教員が作成したシラバスは、学部教務の事務担当者が記入漏れや内容の不備等の点検を行い、それを学部教務委員会と学部教授会で確認し、記載内容を改善する仕組みを設けている。授業内容とシラバスの整合性については、学生による授業評価アンケートや教員による相互授業参観によって確保している（評価の視点 2-8）。

山口大学

山口大学では、講義、実習、遠隔講義に加え、「Glexa」を最大限に活用し、学生の自主学習を支援している。学内外の診療施設や企業の臨床現場でのアクティブラーニング講義を参加型臨床実習で行っているほか、「国際獣医学特別研修」では海外（ケニア・ナイロビ大学）での学習機会を得ることが可能である（評価の視点 2-4）。

動物死体を活用した解剖学教育では、受講生1人あたりの使用動物数は産業動物で0.25頭、伴侶動物で0.21頭、鳥類で0.57羽であり、適正な割合であるといえる。動物種においても、牛、馬、豚、鶏、犬と全ての動物種について解剖学実習を実施している。また、一部の動物種において骨標本及びデジタル教材を用いた学習による代替法を導入している。動物死体を活用した病理学教育では、受講生1人あたりの使用動物数は産業動物で0.56頭、伴侶動物で0.35頭、鳥類が0.24羽であり、こちらも適正な割合である。動物種においても、牛、馬、豚、鶏、犬、猫と全ての動物種について病理学実習を実施している。なお、病理学教育において代替法は導入していない（評価の視点 2-6）。

授業科目を体系的に履修できるように履修指導を適切に行っている。なお、2025年度入学者から新たなカリキュラム・マップ及びカリキュラムツリーが適用され、視覚的にどの科目がいずれの学位授与方針と対応しているかを理解できるように工夫されている（評価の視点 2-7）。

授業時間割は、ウェブサイト及び掲示板で明示している。シラバスには、授業の概要、学修目標、授業計画等を明示し、ウェブサイトを通じて学生に配信している。ただし、一部の自由科目についてシラバスが作成されていないため、全ての科目についてシラバスを作成することが望ましい。シラバス作成に関するガイドラインに基づき、シラバスについては、担当教員の記載事項の点検を学務委員会が行い、記載内容を改善する仕組みを設けている。また、多様な学生への合理的配慮の視点から教員や学生の意見をもとに、シラバスの改定に向けて準備を進めている（評価の視点 2-8）。

【項目：総合参加型臨床実習体制の整備】

共通

特記事項なし

鹿児島大学

総合参加型臨床実習は、「伴侶動物総合臨床実習」「夜間・救急病院総合臨床実習」「産業動物総合臨床実習」「病理臨床解剖学実習」により実施されている。総合参加型臨床実習の各コースには全てコース責任者が置かれている。また、学生の実習スケジュールの調整と管理のためにコース責任者とは別にスケジュール調整担当教員を置いている。さらに、実習全体は共用試験責任者が統括している。

各実習にはマニュアルが整備されており、参加型臨床実習の受講に先立って説明会を開催している。また、診療に学生が参加することについて飼い主への事前の説明を行い、同意書が得られた場合に限定して参加型臨床実習の対象症例としている。学生の診療参加に飼い主の同意が得られなかった場合、診療は獣医師が行い、学生は見学にとどめることを飼い主に説明している。学生に対しては、その症例の診療には参加できないことを口頭で説明している。そのような症例では、学生を動物に触れさせることはないが、検査、診断、治療等に関するディスカッションには参加させている（評価の視点 2-9）。

総合参加型臨床実習の実施にあたっては、基幹教員 16 名と臨床教員 4 名（産業動物診療科 2 名、小動物診療科 2 名）に、病院専任獣医師 2 名（産業動物診療科）、支援スタッフ 19 名（小動物診療科研修獣医師 1 名、愛玩動物看護師 13 名、動物看護助手 4 名、技術専門職員 1 名）の合計 41 名による実施体制を整えている。本実習を担当する基幹教員及び臨床教員は、鹿児島大学獣医学系会議（以下「学系会議」という。）又は教授会で職階に応じた教育・研究・診療実績に関する資格審査を受け承認された常勤教員である。専門診療科を担当する臨床経験 10 年以上の基幹教員を各コースの責任者とし、また臨床経験 20 年以上の基幹教員を統括責任者として配置している。特殊な診療技術、あるいは豊富な診療経験を有している臨床獣医師を兼任教員として招聘し、当該病院で不足している診療科に関する実習内容の充実を図っている。

また、牛臨床コースでは、常勤の畜産系技術専門職員を支援スタッフとして配置している。さらに、参加型臨床実習では、レジデント獣医師、愛玩動物看護師及び動物看護助手（常勤の愛玩動物看護師 1 名を除き非常勤職員）がゲスト講師として参画している。ゲスト講師は、成績評価はできないが、指導助言等を行うことはでき、その資格審査は、教務委員会の議を経て教授会でなされている。このように指導獣医師を適切に選抜し、学生へ指導助言できる人員を増やすことで、きめ細かな学生教育を実践している。現在、臨床研修獣医師や特任専門員（いずれも非常勤職員）の参加型臨

床実習への参画について検討している。

以上のように、総合参加型臨床実習に携わる全ての常勤教員及び兼任教員は「学系会議」や教授会で承認されており、その臨床の経験年数や専門性を鑑みて実習担当教員として適正であると考えられる。また非常勤職員のゲスト講師としての任用も教授会で承認されており、学生指導や助言を行う者として適正であるといえる（評価の視点 2-10）。

山口大学

総合参加型臨床実習は、「伴侶動物総合臨床実習」「産業動物総合臨床実習」「夜間・救急病院総合臨床実習」「病理臨床解剖学実習」で構成されている。「伴侶動物総合臨床実習」は、伴侶動物外科系診療科及び伴侶動物内科系診療科で行っている。実施プログラムは、附属動物医療センター長、外科系診療科及び内科系診療科担当者各 1 名による確認後、臨床教員参加の「動物医療センター会議」で協議しており、実習で生じた問題点についても、同センター会議において対応策を検討している。

「産業動物総合臨床実習」は、大動物臨床診療科及び獣医繁殖学診療科で行っている。実施プログラムは、両診療科に所属する全ての教員からなる「産業動物ワーキング会議」で協議しており、実習で生じた問題点は、「産業動物ワーキング会議」において対応策を検討している。

「夜間・救急病院総合臨床実習」は、「動物医療センター（YUAMEC）」において共同獣医学部の臨床系教員（内科系、外科系）が担当制で夜間・救急診療にあたり愛玩動物看護師が補佐しているが、学生がそこへ参加することで実施している。ただし、2025 年度は学内での実施を休止し、学外動物病院施設での実施に変更している。実際の診療にあたっては、診療補助、各種検査、必要な処置を教員の指導のもとで行っている。

「病理臨床解剖学実習」は、獣医病理学研究室が担当し、学内の総合病性鑑定室で実施される病理解剖に参加する形で行っている。実施プログラムは、専門医資格を持つ担当者各 1 名が確認した後、複数の専門医で協議のうえで実施している。

総合参加型臨床実習全般及び各実習におけるマニュアルを整備しているが、現行の実習マニュアルは、実習前の先行学習や事後学習の観点から十分とはいえず、改善する予定としていることから、着実な実施が望まれる。参加型臨床実習の受講に先立っては、ガイダンスを開催し、実習の実施要領、注意事項、個人情報保護及び守秘義務について説明を行っている。診療に学生が参加する際には、飼い主から同意書を得ていないが、学生が診療に携わることをセンター内に提示するとともに飼い主への説明は行っている（評価の視点 2-9）。

総合参加型臨床実習の指導教員は、「山口大学共同獣医学部専任大学教育職員選考内規」に基づき採用し、特に臨床系教員については、獣医師免許を有し、獣医臨床経

験を持つ者を条件としている。また、「山口大学共同獣医学部獣医客員・臨床教授等の称号付与規則」に基づき選考された、学外の豊富な実務経験を有する優れた者を参加型臨床実習の指導教員とし、指導体制の充実を図っている。さらに、「山口大学共同獣医学部における特命教育職員に関する要項」に基づき、診療業務に加え、臨床実習の指導等に従事する教員2名のほか、教育に関する研修を終えた研修獣医師1名及び愛玩動物看護師15名（2024年5月1日現在）を配置し、万全の実習体制を整えている（評価の視点2-10）。

【項目：臨床能力向上のための教育】

共通

当該獣医学教育課程では、4年次終了時に共用試験（vetC B T・vetO S C E）に合格し、所定の必修科目の単位数を修得することを臨床実習参加の条件とすることで、臨床実習に必要な基本的知識、技能、態度について担保している（評価の視点2-11）。

実習カリキュラムでは、伴侶動物、産業動物、夜間・救急病院、病理臨床解剖学に関する多様なコースを準備し、臨床能力の向上を図っている（評価の視点2-12）。

症例数については、小動物、産業動物共に、総合参加型臨床実習のために十分な数の症例を診察し、学生1人あたりの症例数が適正な割合を大きく上回っている。また、民間農場を活用した豚や鶏の参加型臨床実習や病理臨床解剖実習をローテーションに組み込むことで、充実した参加型臨床実習を提供していることは特色として評価できる（評価の視点2-13）。

学外実習の際は、マニュアルをもとにした事前教育と、実習時における現場での注意事項の説明、指導を組み合わせることで、学生が実習先施設を円滑に利用できるよう努めている。また、実習にあたって、安全手順やバイオセキュリティに関する教育を行うとともに、「学生教育研究災害傷害保険」や「学研災付帯賠償責任保険」への加入を推奨し、臨床実習が始まるまでには100%の保険加入率となっている（評価の視点2-14）。

実習を通じて修得すべき基本的知識・技能・態度の到達目標はシラバスに明示され、学生の達成度について教員が評価している（評価の視点2-15）。

鹿児島大学

鹿児島大学では、総合参加型臨床実習に先立って到達すべき基本的知識・技能・態度の到達目標の設定と、その評価を行っている。「産業動物診断治療学実習」では、牛、馬、豚の診断、診療を行う場合に必要基礎知識、保定法、診断法、検査法及び治療法について、「伴侶動物診断治療学実習」では、伴侶動物の基本的な扱い方、クライアントとの接し方、身体検査法、各種注射法、投薬法、臨床検査法の意義、原理、

判定方法、診断への結びつけ及び治療法について、「伴侶動物麻酔手術学実習」では、動物の麻酔法と適切な麻酔管理法、動物の外科手術に必要な基礎的知識、基本技術について期末試験で評価している。共用試験は4年次後期の配当科目終了後に設定し、適正な評価を行っている。共用試験受験者全員の合否状況は教員に周知され、試験に合格して実習に参加できる学生を事前に確認している。学生の診療参加については「鹿児島大学共同獣医学部附属動物病院における診療従事に関する規則」に定めており、4年次終了時に共用試験に合格し、かつ5年次への進級要件を満たす学生のみが総合参加型臨床実習に参加できることとしている（評価の視点 2-11）。

獣医学教育モデル・コア・カリキュラムの求める基本技能や診療技能を修得する実習として、「獣医臨床基礎実習」「伴侶動物診断治療学実習 A・B」「伴侶動物麻酔手術学実習 I・II」「獣医繁殖学実習」「産業動物診断治療学実習」を4年次までに配置している。5年次には、総合参加型臨床実習である「伴侶動物総合臨床実習」「産業動物総合臨床実習」「夜間・救急病院総合臨床実習」「病理臨床解剖実習」を開講し、更に2023年度からは、6年次学生を対象とした「総合臨床アドバンス実習」（各診療科選択による8～16週の参加型臨床実習：自由科目）を新設した。これらの充実した臨床実習により、学生の臨床能力の向上につながっているだけでなく、「総合臨床アドバンス実習」を履修する6年次生が5年次の学生の参加型臨床実習に関わることで、同受講者がメンターとして活躍している。

各実習のシラバスは整備されており、鹿児島大学シラバス検索システム、教育支援サービス「manaba」、授業支援システム「Glexa」を通じて確認することができる（評価の視点 2-12）。

総合参加型臨床実習は5年次に通年で実施されており、学生1人あたりの実習期間は最短でも伴侶動物臨床実習が16週間、産業動物臨床実習が12週間である。産業動物臨床実習に活用される附属動物病院及び学外診療機関における3か年の平均症例数はそれぞれ5,169頭及び3,376頭/年で、それらを合わせたときの受講生1人あたりの平均症例数は277頭（附属動物病院のみの症例数では、受講生1人あたり平均症例数は168頭）であり、十分な症例数といえる。また、伴侶動物臨床実習に活用する附属動物病院及び学外診療機関における3か年の平均症例数はそれぞれ1,989頭及び152頭/年で、それらを合わせたときの受講生1人あたりの平均症例数は69頭（附属動物病院のみの症例数では、受講生1人あたり平均症例数は64頭）であり、こちらも十分な症例数といえる。これらの実績は、総合参加型臨床実習のために適正な割合を大きく上回る十分な数の症例を診察し、充実した実習が提供されていることを示すものであり、特色として評価できる。

過去に例は無いが、十分な症例数が用意できなかった場合は、電子カルテ情報や臨床病理標本（血液塗抹及び細胞診）等の豊富な資料を用いて、ケーススタディを中心とした補完教育を実施することとしている。また、豚熱や鳥インフルエンザの発生に

よる養豚場・養鶏場や家畜保健所での実習中止の場合は、これまでの実習ビデオや写真を学習資料として用いた代替教育を実施する。一方、体調不良等により総合参加型臨床実習において十分な症例数を経験できなかった学生に対しては、指定の申請書と診断書等の提出によって受講できる補完教育（代替措置）を用意している。この補完教育（代替措置）によって総合参加型臨床実習の単位認定を受けた学生が過去9年間で3名おり、いずれのケースも「障害学習支援センター」を介し代替措置を講じている。具体的な申請内容は主に精神疾患による体調不良に対する配慮であり、当該学生にはケーススタディ、レポート提出や口頭試問等で実習を補完したほか、ハンズオンが必須となる実習内容については、体調を鑑みながら個別対応と補習を行っている。本対応については、科目担当教員のほか、学年担任、学部長、学科長及び教務委員会も共有し、連携して進めている（評価の視点 2-13）。

総合参加型臨床実習における獣医療行為に関するガイドラインは、学部で策定した「Day-One-Skills：獣医師として社会に出る1日目に身につけておくべき必要最低限の技術スキル」がその骨子となっている。参加型臨床実習で使用している Day-One-Skills 表がガイドラインとして機能している。

学内実習施設の利用に際して、各施設のバイオセキュリティ SOP が策定されており、全ての学生は臨床実習に先立って、実験・実習安全の手引き等の資料に記載の利用マニュアルに基づいた教育を受講する。くわえて、総合参加型臨床実習の事前学習として、電子カルテ情報の取扱い、守秘義務、SNS への投稿禁止等、個人情報の保護に関する教育も実施している（評価の視点 2-14）。

総合参加型臨床実習を通じて修得すべき基本的知識・技能・態度の到達目標は、E A E V E の基準に合わせ、上述の「Day-One-Skills：獣医師として社会に出る1日目に身につけておくべき必要最低限の技術スキル」において133項目を設定し、これら全てについて各学生の到達度を担当教員が評価し、その結果を可視化するシステムを構築している。本システムは2018年に構築されて以降、毎年度見直しを行いながら実行しており、各学生の Day-One-Skills の到達度に関する電子データをクラウド上で管理している。学生は、このシステムを通じて参加型臨床実習で経験した項目をチェックし、規定の経験回数に達した後、担当教員による技能評価試験を受験し、それへの合格をもって、課題の項目達成が認定される。あわせて、自らが得た能力と足りない能力を明示するログブックを活用し、Day-One-Skills の必須項目（104項目）全ての到達により、総合参加型臨床実習の単位を認定している。このシステムは、きめ細かに学生の修学状況を把握できるという点から優れているといえる。さらに、前述したように、より専門性の高い臨床教育の充実を企図した「総合臨床アドバンス実習」を6年次に新設し、同科目の受講者も増えており、学生の臨床能力の担保及び向上につながる取組みとして高く評価できる（評価の視点 2-15）。

山口大学

当該獣医学教育課程では、5年次への進級及び共用試験の合格をもって総合参加型臨床実習への参加を認めている。5年次への進級要件は、4年次終了までに基礎教育科目10単位、専門教育科目121単位以上を含めた合計159単位以上の修得としている。全ての科目において学修の到達目標が設定されており、これらの単位修得及び共用試験の合格により、臨床実習開始前に達成すべき基本的知識・技能・態度を担保している（評価の視点2-11）。

総合参加型臨床実習の「伴侶動物総合臨床実習」に関して、一次診療実習、エキゾチックアニマルを対象とした臨床実習及びシェルターメディスン実習については外部施設で行っている。「産業動物総合臨床実習」は、大動物診療科と繁殖診療科で行われ、学内での豚診療、県内養鶏場での実習、山口県立農業大学校での牛診療実習、NOSA I山口における一次診療実習、乗馬クラブにおける検診、牛群検診及び繁殖管理、往診による個体診療に加え、「動物医療センター」に来院する牛馬の学内診療及び手術により構成されている。「夜間・救急病院総合臨床実習」は夜間20時から翌朝まで「動物医療センター」で、「病理臨床解剖学実習」は学内外の施設で実施している。

全ての臨床実習科目においてシラバスを整備し、学習支援システムを介して学生に明示している。臨床実習は、学生を最大8名の少人数の班に分けることで、各学生の実習への参加度を高めるとともに、きめ細かい指導を可能としている。この少人数制は教員による監視を強化し、患者及び学生の安全にもつながっている。学生は、豊富な臨床経験を有する教員の指導のもと、総合参加型臨床実習ガイドラインに定められた獣医療行為の修得を通じて、臨床能力を向上させている（評価の視点2-12）。

附属獣医学教育病院等における総合参加型臨床実習の症例数に関して、「動物医療センター」における伴侶動物の年間診療頭数は多く、学生1人あたりの症例数は160症例を超えている。診療時間が長時間となる場合は、時間を区切って実習を終了し、学生のワークライフバランスに配慮している。産業動物の症例数に関しても学内外での診療を通じて、学生1人あたりの症例数は60症例を超えている。これらの実績は、総合参加型臨床実習のために適正な割合を大きく上回る十分な数の症例を診察し、充実した実習が提供されていることを示すものであり、特色として評価できる。なお、十分な症例数を経験できなかった場合は、シミュレーター等で補完教育を行う準備を整えている（評価の視点2-13）。

学生の獣医療行為については、総合参加型臨床実習ガイドラインに定められている。同ガイドラインでは、学生を指導する教員及び臨床職員の経験年数に応じて、学生が実習内で実施可能な獣医療行為を定義している。また、実習開始前のガイダンスにおいて、施設内設備使用の注意点、守秘義務、電子カルテの情報の取扱い、個人情報取扱い、SNSへの掲載禁止等について説明するほか、年度当初に行われるオリ

エンターションにおいて、バイオセキュリティの説明を行っている（評価の視点 2-14）。

臨床実習を通じて修得すべき基本的知識・技能・態度の到達目標は、シラバスに記載し、学習支援システムを介して学生に明示している。「伴侶動物総合臨床実習」及び「産業動物総合臨床実習」においては、学生は毎回ケースログを作成・提出し、診療内容の理解度及び実施した技能の修得度について教員が評価している。また、実習中に来院した患畜の診療内容について、毎回教員と学生でディスカッションを行い、理解を深めるとともに修得した知識・技能・態度について評価を行っている。これらにより、臨床実習終了時には、Day-One-Skills の修得を担保し、更には本実習を通じて Day-One-Skills 以上の臨床的技術に触れることにより、高度な技術取得に向き合う姿勢を促している（評価の視点 2-15）。

【項目：成績評価・卒業認定】

共通

当該獣医学教育課程では、全ての授業科目のシラバスに授業計画や評価基準を明記し、学生に周知している（評価の視点 2-16）。

成績はウェブシステムで開示され、学生自身による確認が可能である。評価は成績評価方法及び基準に基づき公正に実施され、毎年成績分布表を各大学の教授会で報告のうえ、「共同獣医学部協議会」において両大学間で共有し、妥当性を検証している（評価の視点 2-17）。

両大学共通の進級判定基準は各大学の履修の手引きに記載し、進級判定は各大学の教授会で審議している（評価の視点 2-18）。

また、学生は成績に対して異議申立てを行うことができるようになっている（評価の視点 2-19）。

卒業認定は、学位授与方針に基づく両大学共通の卒業要件単位数の取得状況を各大学の教授会で審議し、公正かつ厳格に行われている。また、当該獣医学教育課程の卒業認定を受けた学生は E A E V E に定められた国際基準の「Day one competencies」を修得していることが担保されている（評価の視点 2-20）。

鹿児島大学

成績評価の基準と方法は、各科目のシラバスに記載されており、全学共通のシラバスシステムを通じて学生に周知している。成績評価は、その評点と評価基準に関する学部のガイドラインにより、臨床基礎実習（前臨床実習）や臨床実習等を含む各科目で大きな偏りが生じないように運用されている。「卒業論文」の評価については、指導教員の評価が 70%、卒論発表会の評価が 30%（発表資料作成、プレゼンテーション技術、質疑応答について各 10%を指導教員以外の教員により評価）とし、客観的な

評価方法を導入しているが、評価基準に関する詳細は定められていない（評価の視点 2-16）。

成績分布図を作成しており、GPA算出の妥当性の検証にも活用している。設定された成績評価の基準・方法により、成績評価を公正かつ厳格に実施しているといえる（評価の視点 2-17）。

進級判定は第4期（2年次）と第8期（4年次）終了時に実施している。進級要件は「履修の手引き」に明示し、入学時のオリエンテーションのほか、各年次においても定期的に周知している。進級判定は、学部教務系の事務担当者がとりまとめた進級年次の単位取得状況を担任教員、学部教務委員長及び学部長が確認し、進級判定資料として教授会に提出のうえ、進級判定基準に準じて審議を行い、最終決定するプロセスにより行っている。留年者及び退学者等については、教務委員長及び担任による確認後、教授会の審議を経て決裁される（評価の視点 2-18）。

学生からの成績開示請求や異議申立てに対しては、学部教務係が窓口となり、学部規則に沿って対応している。上記の制度は、「履修の手引き」に記載し、入学時のオリエンテーションで手順も含めて周知している（評価の視点 2-19）。

卒業認定の基準は、学位授与方針に従い、卒業要件単位として計195単位を設定のうえ、「履修の手引き」に明示している。卒業判定資料は学部教務系の事務担当者によって作成され、学年担任の教員、学部教務委員長及び学部長による確認後、教授会での審議を経て、学長が卒業について決定している（評価の視点 2-20）。

山口大学

シラバスに、全ての授業科目の授業計画、目標、評価方法を明記し、ウェブサイトを通じて学生に周知している。成績評価基準は、「履修の手引」において明示されている。また、4年次から配属される研究室での活動では、最終的に6年次に卒論発表を行っており、その評価方法はシラバスに明記されている（評価の視点 2-16）。

各授業科目の担当教員は、シラバスに記載した評価基準・方法によって成績評価を行っている（評価の視点 2-17）。

進級判定基準は、「履修の手引」に記載し学生に周知している。進級判定は、後期成績が出揃った時点で判定資料を作成し、教授会において行っている。留年者については、未修得科目や今後の履修について確認し、教員間で情報共有している（評価の視点 2-18）。

成績に関する異議申立ては、成績評価異議申立てに関する要項に基づき、学生が申し立てられるように整備している。要項はウェブサイトを通じて公開・周知している（評価の視点 2-19）。

卒業認定は、卒業要件を踏まえ、教授会における公正かつ厳格な審議を経て、学長が決定している。卒業要件は「履修の手引」に明示されている（評価の視点 2-20）。

【項目：教育成果の検証】

共通

学生の学習成果（全科目の単位取得状況やGPA）は半期ごとに確認し、必要に応じて指導や教育改善を行っている（評価の視点 2-21、2-22）。

参加型臨床実習では、技能や態度についてプレゼンテーションやケースレポートにより把握している。卒業生の国家試験合格率や進路状況についても分析を行っている（評価の視点 2-21）。

また、卒業生に対し、学習成果やキャリアに関するアンケートを行い、その結果を教育改善に活用している（評価の視点 2-22）。

鹿児島大学

学生の学習成果については、EAEVEの「Day one competencies」や参加型臨床実習における Day-One-Skills 等の基準をもとに、達成度評価が厳正に行われている。成績の評価結果については、同一学年における科目間の比較、あるいは同一科目における学年間の比較の分析に利用している。卒業生の国家試験合格率や進路状況についても把握しており、学習成果との分析・検討を行っている。過去5年間の国家試験合格率は、新卒者で84.4～96.9%で推移し、既卒者を含めた合格率は79.4～93.9%であった。過去5年間の卒業生の獣医関連業務への就職は62.1～84.4%で推移しており、4年前は大学院への進学者数が多くなったことを理由に低値となったが、その年度以外では概ね8割以上の学生が獣医関連業務へ就職している。卒業生に対しては、学生時代の学習成果と獣医師としてのキャリアについて、卒業生個人及び就業先にアンケート調査を行い、その結果を教育成果の検証材料として活用している（評価の視点 2-21）。

参加型臨床実習における Day-One-Skills の内容については、学習成果の検証結果や学生アンケートの結果を踏まえ、参加型臨床実習担当教員と学部教務委員長による検討結果をもとに、毎年度改善に向けた変更が行われている。また、学習成果の検証結果や、学生及び卒業生を対象としたアンケートの結果、低学年次の研究活動や高学年次より専門性の高い臨床教育の充実が必要との判断に至り、2・3年次の「獣医学研究基礎実習」や6年次の「総合臨床アドバンス実習」を新たに導入した実例がある（評価の視点 2-22）。

山口大学

学生の学習成果（全科目に対する単位取得状況やGPA）は、半期ごとに全教員で共有している。また、参加型臨床実習における技能や態度については、症例に関するプレゼンテーションやケースレポートを確認することにより把握している。卒業生

の国家試験合格率や進学・就職状況については毎年結果の把握と分析を行っており、過去5年間の現役学生の国家試験合格率は80%以上であり、卒業生の獣医関連業務への就職率も80%以上であった。卒業生に対しては、在籍時と卒後キャリアについてのアンケート調査を行い、教育成果を検証している（評価の視点2-21）。

半期に一度、全科目の単位取得状況やGPAを確認し、成果が十分でない学生への指導を行うと同時に、成績分布に偏りがある担当教員には教育内容の改善を依頼している。卒業時にはアンケートを実施し、在学中の教育内容や学修環境、支援体制等に対する評価や意見を収集している。集計結果は関係部署で報告・共有し、教育の質向上に向けた基礎資料として活用している（評価の視点2-22）。

<提 言>

○長 所

鹿児島大学

- 1) 総合参加型臨床実習を通じて修得すべき基本的知識・技能・態度を「Day-One-Skills：獣医師として社会に出る1日目に身につけておくべき必要最低限の技術スキル」として設定し、133項目全てについて各学生の到達度を担当教員が評価しその結果を可視化している。さらに、より専門性の高い臨床教育の充実を企図した「総合臨床アドバンス実習」を6年次に新設し、受講者も増加しており、学生の臨床能力の担保・向上につながる取組みとして高く評価できる（評価の視点2-12、2-15）。

○特 色

共通

- 1) 小動物、産業動物共に、総合参加型臨床実習のために十分な数の症例を診察し、学生1人あたりの症例数が適正な割合を大きく上回っている。また、民間農場を活用した豚や鶏の参加型臨床実習や病理臨床解剖実習をローテーションに組み込むことで、充実した実習を提供している点は特色として評価できる（評価の視点2-13）。

○検討課題

共通

- 1) 実習科目は、その内容により必要な教員数が異なることは理解するが、30名前後の受講生に対して教員（TAを含む）1人で担当する科目が存在している。前回の評価結果でも指摘しているが、教員配置人数の適正性を再確認するとともに、SAの配置を検討することが望まれる（評価の視点2-5）。

3 教育研究等環境

<概 評>

【項目：獣医学教育の実施に必要な施設・設備】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学の講義室にAVシステムや遠隔配信システムを導入し、双方向授業が可能な環境を整備している。実習施設やスキルスラボを設けているほか、「動物医療センター」や附属動物病院等の臨床実習施設も利用されており、獣医学教育を支える充実した施設が整備されているといえる（評価の視点 3-1）。

図書館等の学術情報の利用環境も適切に整備しており、附属獣医学教育病院の施設・設備は総合参加型臨床実習等の教育活動に加え、研究活動・地域貢献にも寄与している（評価の視点 3-2、3-3）。

鹿児島大学

全ての講義室にはAVシステムがあり、パソコンやDVDの教材をスクリーンに映し出すことができる。実習室についても1学年が実習を受けるのに十分な広さの教室が多数用意されており、各教員が管理する研究室では卒業研究の遂行に十分な設備が設置されている。また、スキルスラボには、静脈確保や皮膚縫合等のシミュレーターを設け、モデル教材を使用した実習のほか、臨床実習の時間外には学生が自学習のために利用できるよう整備されている。学生自習室では、学内ネットワークに接続した10台のパソコンを使用し、eラーニングコンテンツ、バーチャルスライド及び録画授業をオンデマンドで視聴することが可能である。同室には、専門図書も配置されており、図書室としての機能も有している。以上のことから、獣医学教育の実施に必要な教育施設・設備を適切に整備しているといえる（評価の視点 3-1）。

鹿児島大学附属図書館は、当該大学の学生のみならず山口大学共同獣医学部学生及び同研究科大学院学生も利用できる。獣医学系の蔵書は十分にあり、蔵書の貸出しだけでなく、雑誌論文、学位論文、電子ジャーナル等の資料をウェブ上で学内外のデータベースから利用できるサービスを備えている（評価の視点 3-2）。

附属獣医学教育病院は、「小動物診療センター」「大動物診療センター」「軽種馬診療センター」及び「大隅産業動物診療研修センター」からなり、それぞれ臨床実習に必要な病院施設が整備されている。「小動物診療センター」には、実践的な参加型臨床実習ができる環境が整っているほか、使用頻度の低い部屋を学生用のラウンジとして用途変更するなど、実習中の休憩等が随時できるよう工夫している。牛の診療を主体とする施設である「大動物診療センター」には、病理解剖室も整備されており、総合参加型臨床実習の病理学コースの学生が診断実習を行っている。「軽種馬診療センター」は、わが国の獣医系大学では唯一の馬専用の二次診療施設であるほか、「大隅産業動物診療研修センター」では、獣医師である教員による牛や馬の往診療に同行

する形態で1週間の臨床実習を3回行っている。「大隈産業動物診療研修センター」は、学生教育だけでなく、地域の獣医師や畜産技術者に対するセミナー等の卒後教育の場としても活用されている。

「入来牧場」は、共同獣医学部が管理する附属牧場であり、大学管理の牛や馬を対象とする獣医臨床基礎実習で使用している。同牧場は、このほかにも他学部（農学部や教育学部）及び連携協定校の学生実習やさまざまな学外団体の研修会に利用される。また共同研究フィールド拠点としても活用されている。

このように、附属獣医学教育病院は、伴侶動物から産業動物まで、多様な動物種に対する多彩な診療業務を通じて、参加型臨床実習を行える環境にあるほか、日中の診療だけでなく、犬・猫・牛・馬を主な対象とした夜間救急に対する診療も受け付けている。特に小動物、牛及び馬それぞれに対する診療施設を設けている点、夜間救急に対する診療に関する実習体制も整備している点は優れており、特色として評価できる（評価の視点 3-3）。

山口大学

主に実習で使用する「獣医学国際教育研究センター（iCOVER）」には、大人数に対応した実習室、感染症対策がとられた実習室（BSL3）及び国際水準の実験動物飼育施設が備えられており、より高度な教育プログラムが実践できるようになっている。また、クリニカル・スキルスラボでは、視診、触診、聴診用の動物模型、縫合シミュレーター等を備え、臨床技能取得トレーニングを行うことが可能となっている。さらに、獣医学部学生専用の図書室も設置しており、学生は自習室として利用することができる（評価の視点 3-1）。

獣医学教育及び研究に必要な学術情報資料に関しては、山口大学図書館の蔵書又は電子ブックに加え、図書館で契約している電子ジャーナル、データベースの利用も可能となっている。当該大学にない資料に関しては、学外機関等から取り寄せて提供するサービスを行っている。山口大学学術機関リポジトリ（YUNOCA）により、当該大学において創出された電子的学術情報資源を学内外に無償で発信・提供している。また、学生指導の一環として、インターネットによる学術論文ダウンロードサービス等の利用を指導している。このように、学生及び教員が必要とする学術情報が入手できる環境が整備されている（評価の視点 3-2）。

附属獣医学教育病院の活用に関して、「動物医療センター」には、臨床実習に必要な病院施設が整備されており、学生はこれらの施設に対して、自由にアクセス可能となっている。また、研修獣医師の教育や外部獣医師の見学実習、臨床獣医師向けの教育セミナーやハンズオン実習、動物看護専門学校の実習等のほか、獣医師の卒後教育や獣医療職域者の教育等も行っている。以上のことから、附属獣医学教育病院の施設・設備は総合参加型臨床実習等の教育に活用できるよう十分整備されていると

いえる（評価の視点 3-3）。

【項目：附属施設の整備】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学において、獣医学教育及び研究を支える高度な施設が設置されている。学生はこれらの施設を利用した教育を受けることができ、卒業研究にも活用している。また、必要に応じて外部機関との共同研究や研修等にも利用されている（評価の視点 3-4）。

鹿児島大学

共同獣医学部附属施設は、教育のみならず研究の推進にも利用されており、学生の卒業研究にも活用されている。また、必要に応じ外部教育研究機関との共同研究や研修等にも利用されている。例えば「TADセンター」では、TADの病原体、流行及びその制御に関する教育研究を行っており、卒後教育の一環として、市民公開講座を年1回開催している。さらに、長崎大学及び宮崎大学との3連携により、文部科学省「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業」及び「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」の採択を受け、動物からヒトへ感染が拡大するスピルオーバー感染の研究を強化する計画としており、「TADセンター」における教育研究機能の更なる向上が期待される。

産業動物臨床獣医学、動物衛生学及び畜産学の教育研究を担うために設置された「SKLVセンター」では、当該大学の学生のみならず、全国の畜産・獣医学部の学生を多数受け入れ、産業動物臨床獣医学と動物衛生学の実習を行い、産業動物臨床獣医師及び公務員獣医師の充足に向けた教育研究に取り組んでいる。また、地域産業を支える畜産・獣医関係技術者の学び直しや産学官連携による家畜診療体制の構築等を通じて、畜産振興にも寄与している。上記のように、獣医学教育の特徴を生かした施設を設置し、教育研究を展開している（評価の視点 3-4）。

山口大学

「iCOVER」においては、国際水準の獣医学教育に対応した獣医学教育プログラムの開発と、獣医学研究の促進と高度化を目指した取組みを行っており、鹿児島大学との双方向の遠隔実習にも対応した実習室を設けて、高いレベルでの病原体取扱いに関する安全管理を修得できるようにしている。

また、国際水準のバイオセキュリティ・バイオセーフティーに配慮された病理解剖室を有する「総合病性鑑定研究施設（iPaDL）」を設けているほか、MRI、CT装置、放射線治療装置等による高度獣医療を提供する「動物医療センター」は、獣医学教育に不可欠な教育病院としての機能に加え、西日本における中核病院（二次

診療施設)としても機能している。国際水準の実験動物学の教育及び有用な実験動物の開発、研究並びに情報収集を行うことのできる「先端実験動物学研究施設 (ARC LAS)」や、中型実験動物の飼養保管及び実験動物に関する教育及び研究を行い、教育研究活動を支援するための「実験動物施設 (CEA)」も整備されている。

「One Welfare 国際研究センター」は、人獣共通感染症や食品・環境由来感染症等、医学と獣医学が連携して取り組んできたワンヘルス教育研究を更に発展させるためのセンターであり、学生は同センターによる講義・実習や海外への派遣及び課外活動を通じて、ワンウェルフェアの概念を身につけることが可能となっている。

上記のように、獣医学教育の特徴を生かした施設を設置し、教育研究に活用しているといえる (評価の視点 3-4)。

【項目：各種実験・研究・診療活動に関する環境整備】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学において動物使用に関する規則を制定し、各大学の動物実験に関する委員会によって、倫理的妥当性や動物福祉を考慮して動物実験計画を審査している。実験施設には動物福祉に配慮した設備が整備され、動物実験に関わる教員、学生等には定期的な教育訓練が義務づけられている。また、実験の実施状況を定期的に把握し、自己点検・評価を行い、必要に応じて情報公開を実施している (評価の視点 3-5、3-6)。

病原体等利用実験、遺伝子組換え実験に関しても適切な安全管理の措置がとられている (評価の視点 3-7、3-8)。

さらに、両大学は研究倫理や研究・診療活動に関する規則を策定し、不正行為の防止に努めている (評価の視点 3-9)。

鹿児島大学

附属施設である総合動物実験施設には、大動物 (牛、馬、豚)、中動物 (犬、猫)、小動物 (マウス、ラット、ウサギ、ハムスター、モルモット) 及び家禽 (鶏) を飼育するための飼育室、動物実験を実施するための設備が完備されている。施設内に飼育されている動物のケアは、学部教員 (獣医師) と飼育管理スタッフ (技能補佐員) で構成された部門が担当することにより、飼育環境を適切に管理している。総合動物実験施設における動物のケアと実験の実施体制は、動物福祉・動物実験倫理に関する国際認証機構である AAALAC International に認証されている。

実験の審査体制に関しては、「鹿児島大学における動物実験に関する規則」「国立大学法人鹿児島大学動物実験委員会規則」に則り、「動物実験委員会」(以下「全学委員会」という。)を設置している。全ての動物実験計画は、共同獣医学部に設置された「学部動物実験委員会」による一次審査、「全学委員会」の委員のうち動物実験等に

関する有識者による二次審査、更に「全学委員会」の委員による三次審査を経て承認される。動物実験の実施状況及び結果の把握、飼養保管施設・実験室の調査・承認、教育訓練の実施等を行うため、学内規則に基づき委員会を適切に設置しているといえる。

動物実験に関する学内規則としては、上述の規則のほか、「鹿児島大学における飼養保管施設及び実験室に関する基準」「発がん物質等危険物質を用いた動物実験に関するガイドライン」及び「動物実験に関する申合せ」を策定している。飼養保管施設では、飼養保管のマニュアルを定め、動物実験実施者及び飼養者に周知し遵守させている。総合動物実験施設では、「総合動物実験施設標準操作手順書」及び各種マニュアルを策定し、動物実験及び飼養保管施設の自己点検・評価手順を定めて実施している。

しかし、2021年度から2023年度に鹿児島大学の共同獣医学部で実施された動物実験について、大学が承認した動物実験計画書と異なる実験が実施されていたことが明らかになった。これを受け、鹿児島大学では、「全学委員会」が毎年度使用する「動物実験の自己点検票」を改定したほか、ワーキンググループを設置し再発防止策の策定に着手している。また、当該共同獣医学部では、実験計画書と実施内容の整合性の確認を徹底することや、感染症リスクに応じたバイオセーフティ管理と施設基準の厳守を行うこととしており、これらを確実に実施していくことが望まれる（評価の視点 3-5、3-6）。

病原体等利用実験に関する学内規則として、「鹿児島大学病原体等安全管理規則」を定めている。さらに、「鹿児島大学病原体等安全管理規則適用病原体」「鹿児島大学における病原体等の管理要領」及び「病原体等のBSL分類」を制定し、病原性微生物のリスク分類と取り扱い方法について必要な事項を定めている。「鹿児島大学病原体等安全管理規則」に基づき「病原体等安全管理委員会」を設置しており、特定病原体等又は監視伝染病病原体の安全管理に関する活動、病原体等取扱実験室及び病原体等取扱検査室の設置・変更・廃止に関する審査活動を実施している。総合動物実験施設では、BSL2に相当する病原体等を扱う動物実験（ABS L2）を実施する動物実験室と飼養保管施設を有しており、学内規則等に則り必要な安全管理を行うための標準操作手順書を作成し、安全に動物実験を実施できる体制を整備している（評価の視点 3-7）。

遺伝子組換え実験に関しては、「鹿児島大学遺伝子組換え実験安全管理規則」を策定している。学内規則に基づき設置された「遺伝子組換え実験安全委員会」が、遺伝子組換え実験計画の審査、遺伝子組換え実験の実施状況及び結果の把握、実験室の調査・承認、教育訓練の実施等を担っており、遺伝子組換え実験の適正な実施のために必要な体制が構築されている。遺伝子組換え実験計画の審査は、動物実験の「全学委員会」と連携して実施している（評価の視点 3-8）。

研究活動上の不正行為を防止するため、「鹿児島大学における公的研究費の取扱いに関する規則」「鹿児島大学における研究活動上の不正行為に関する規則」及び「国立大学法人鹿児島大学における公的研究費の不正使用に係る調査等に関する取扱規則」を制定している。また、公的研究費の不正使用防止推進部門や通報・相談窓口を設置している。さらに、全学的に共通するポリシーを定めて教職員に周知するとともに、研究倫理やコンプライアンス教育を定期的実施している。

附属獣医学教育病院での臨床研究に関しては、「鹿児島大学共同獣医学部獣医療臨床研究等に関する規則」を定めており、臨床研究における臨床倫理及び獣医療倫理の遵守を求め、臨床研究に関する倫理審査、実施状況及び結果の把握、情報公開その他臨床研究の適正な実施に関して報告又は助言を行う組織として「共同獣医学部獣医療臨床研究等に関する倫理委員会」を設置している。臨床研究の適正な実施のために、同委員会は獣医療臨床研究等に関する倫理審査申請書、獣医療臨床研究等同意書、臨床研究の実施計画に関する書類、臨床研究協力者への趣旨を説明する書類の提出を求めている（評価の視点 3-9）。

山口大学

「国立大学法人山口大学における動物使用に関する規則」に基づき、「総合科学実験センター先端実験動物学研究施設」（以下「先端実験動物学研究施設」という。）及び「共同獣医学部附属実験動物施設」（以下「附属実験動物施設」という。）を設置している。設置にあたっては、同規則のほか、「山口大学実験動物飼養保管施設設置審査について（申合せ）」に規定された審査項目に基づき、「動物使用委員会」において審査を受け、承認を得ている。「先端実験動物学研究施設」はマウス、ラット等の小動物を、「附属実験動物施設」は犬等をはじめとする中型動物を飼育しており、いずれも動物福祉に配慮した飼育環境となっている。動物の使用計画の適合性の審査については、「動物使用委員会」のもと、大学の各地区に「地区委員会」を設置のうえ、共同獣医学部申請分は、「山口地区動物使用委員会」において行っている。承認された動物使用計画（新規申請）に係る動物使用実施者・実験補助者は、使用開始前に教育訓練を受けることを必須とし、その後は5年に一度の受講を義務づけている（評価の視点 3-5）。

動物実験の実施にあたっては、「国立大学法人山口大学における動物使用に関する規則」を制定し、「先端実験動物学研究施設」の利用者は「先端実験動物学研究施設標準作業手順書」、「附属実験動物施設」の利用者は「山口大学共同獣医学部附属実験動物施設 動物飼養保管施設標準作業手順書：北棟専用」といった管理マニュアルに従って動物実験を行っている。全ての動物実験計画は「山口地区動物使用委員会」が審査し、実験動物の飼養保管状況の確認や利用者に対する教育訓練を行っている。飼養保管施設や実験の実施状況等については、定期的に自己点検・評価を行い、必要に

応じて情報を公開している（評価の視点 3-6）。

山口大学における病原体等、病原微生物等の所持、保管、取扱い等については、「国立大学法人山口大学病原体等安全管理規則」（以下「安全管理規則」という。）及び「国立大学法人山口大学病原微生物安全管理要項」を制定している。さらに、「安全管理規則」の規定に基づき、「バイオセーフティ委員会」を設置しており、全部局等の責任体制を明確にした安全管理体制が整えられている。病原体取扱主任者及び病原体取扱者には年1回以上の教育訓練を義務づけている。また、学部における教育の実践に関しては、「共同獣医学部バイオセキユリティー・バイオセーフティ委員会」において、「山口大学共同獣医学部実習室バイオセキユリテーターマニュアル」を制定し、安全管理体制を整えている（評価の視点 3-7）。

遺伝子組換え実験については、「国立大学法人山口大学組換えDNA実験安全管理規則」を制定し、同規則の規定により設置された「組換えDNA実験安全委員会」において機関承認実験及び大臣確認実験に関する機関内手続における審査及び承認、教育訓練、「組換えDNA実験安全管理マニュアル」の作成・更新、拡散防止措置の適切な実施管理等を行っている（評価の視点 3-8）。

研究倫理や研究・診療活動の不正防止に関しては、「国立大学法人山口大学研究者倫理綱領」（以下「綱領」という。）を制定し、学術研究活動における研究者の使命と目標を表明している。併せて「国立大学法人山口大学における研究者の学術研究に係る不正行為に関する措置等に関する規則」において、研究者に対して「綱領」に基づいた行動を促すとともに、研究者の不正行為に対する措置等の必要事項を定め、大学ウェブサイト上に「学術研究に係る不正行為の防止」のページを設置し、広く内外に公表している。また、研究者に対しては、5年ごとにeAPRINプログラムにより定期的に研究倫理教育が行える体制を整えている。さらに、研究規範についての研修及び教育の企画・実施や、国内外における情報の収集及び周知、申立て等により指摘のあった不正行為に関する調査、審査及び認定を行う組織として、「研究規範委員会」を設置している。くわえて、「山口大学共同獣医学部附属動物医療センターにおける動物臨床試験に関する倫理規則」に基づき設置された「動物臨床試験倫理委員会」において、動物臨床試験の実施計画の適否・倫理的妥当性について審査を行っている（評価の視点 3-9）。

【項目：国際性を踏まえた教育環境の整備】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学いずれも複数の国際交流協定を締結しており、海外の大学との学生交流や共同教育プログラムを積極的に実施することを通じて、グローバルな視点で学びながら、獣医師としての能力を高め、国際感覚を有した獣医師の育成に取り組んでいる（評価の視点 3-10）。

鹿児島大学

鹿児島大学では11の国・地域の11機関と交流を行っており、そのうち8の国・地域の8機関とは部局間国際学術交流協定を締結している。EAEVE認証校であるヴェットアグロスープ及びアルフォー獣医大学とは、5年次の参加型臨床実習における相互互換や6年次の「国際獣医学研修」（アドバンス臨床実習）における学生派遣の取組みを行っている。また、ジョージア大学、中興大学及びチョットグラム獣医動物科学大学（バングラデシュ）から学生を受け入れ、鹿児島大学の臨床教育に参加する機会を提供している。多彩な交流先を有しそれぞれ活発な交流を持っている点は特色として評価できる。海外留学を予定している学生には、特任教員（常勤教員）による英語指導を集中的に事前実施するなど、国際感覚と社会的教養を備え、海外でも活躍できる獣医師の育成に力を入れている様子が窺える（評価の視点3-10）。

山口大学

山口大学はスペインのサラゴサ大学や台湾の中興大学と留学生の交流実績があり、毎年1、2名の学生の派遣・受け入れを行っている。また、2020年に採択された、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」では、当該大学共同獣医学部とケニアのナイロビ大学獣医学部の連携を軸に、相互交流によりグローバルな視点から学ぶことで、感染症分野に貢献する獣医師の養成を目指しており、2022年から学生の派遣・受け入れを毎年行っている。2024年度からは、韓国の全北大学との交流も新たに開始している。以上から、国際感覚を備えた獣医師を育成するための環境整備を適切に行っており、多彩な交流先を有し活発な交流を持っている点は特色として評価できる。

また、「iCOVER」では「動物感染症総合実習A」を開講し、協定を結んだ海外からの学生を受け入れている。参加する在学生にとっては、グローバルな視点を学ぶよい機会となっていると考える（評価の視点3-10）。

< 提 言 >

○特 色

鹿児島大学

- 1) 附属動物病院において、小動物、牛及び馬それぞれに対する診療施設を設けるとともに、夜間救急に対する診療に関する実習体制を整備している点は特色として評価できる（評価の視点3-3）。
- 2) 海外の大学との間に多彩な交流関係を有しており、EAEVE認証校との参加型臨床実習における相互互換や学生の派遣・受け入れなど、活発な交流を持つことにより、国際水準の教養を備えた獣医師を養成するための環境整備を

行っていることは特色として評価できる（評価の視点 3-10）。

山口大学

- 1) 海外の大学との間に多彩な交流関係を有しており、感染症分野に貢献する獣医師の養成を目指した相互交流、学生の派遣・受け入れなど、それぞれ活発な交流を持つことにより、国際水準の教養を備えた獣医師を養成するための環境整備を行っていることは特色として評価できる（評価の視点 3-10）。

4 学生の受け入れ、支援

<概 評>

【項目：学生の受け入れ方針、入学者選抜の実施】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学で共通した学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を策定し、求める学生像として「獣医師の幅広い職責について理解し、獣医学を志す明確な目的意識を有する人」「自然科学、人文・社会科学及び語学に関する基礎教科を満遍なく学習し、獣医学の知識や技術を十分に理解・修得するための基礎学力を身に付けている人」等を定め、入学者に求める水準を明示している。本方針は、ウェブサイト及びガイドブックを通じて公表している。選抜方法及び手続等が記載された学生募集要項についても、ウェブサイトにより公表している（評価の視点 4-1、4-3）。

入学者選抜に関しては、両大学において学力や人間性、協働性を評価する多様な入試制度を実施し、大学入学共通テストや個別学力検査を通じて基礎学力を担保している。また、各大学の学内規則に基づき、責任ある組織体制のもとで適切かつ公正に入学者選抜を実施している（評価の視点 4-2、4-4）。

鹿児島大学

鹿児島大学では、学生の受け入れ方針に沿った学生募集要項を定め、一般選抜（前期・後期）、総合型選抜（自己推薦型選抜）、学校推薦型選抜Ⅱにより、入学者の能力・適性を適切に評価している。

一般選抜（前期）では、個別学力検査により学力3要素のうち知識・技能を重点的に評価している。また、2023年度入試から、個別学力検査又は共通テストをそれぞれ重視する2種類の配点パターンによる選抜方法を導入し、入学者の能力を幅広く評価している。

学校推薦型選抜Ⅱでは、面接試験により主体性・多様性・協働性を測り、更に小論文試験により思考力・判断力・表現力を測ることで、学力の3要素を評価している。また、2023年度入試から、「卒業後に鹿児島県あるいは鹿児島県農業共済組合の獣医師として勤務を希望する者」を出願要件とする地域枠選抜を導入し、鹿児島県の産業動物に係る獣医療に貢献する意欲を持つ人材に修学の機会を与える選抜方法を設定している。

総合型選抜（自己推薦型選抜）では、面接試験に加え、講義型試験により思考力・判断力・理解力・文章での表現力を評価する多様な入試制度を採り入れている。これにより、当該学部が求める人材像に相応した意欲の高い学生を選抜している。

上記全ての入試制度においては、大学入学共通テストを課すことで、入学者の学力を担保している。

さらに、国際バカロレア選抜及び私費外国人学部留学生選抜を実施しており、多様な人材に修学の機会を与えている（評価の視点 4-2）。

入学者選抜では、「鹿児島大学入学者選抜規則」及び「鹿児島大学共同獣医学部常設委員会規則」により、「全学入試委員会」「問題作成・答案採点専門委員会」「成績集計専門委員会」及び「学部入試委員会」を置き、入学者選抜実施組織として学長を本部長とする「学力検査実施本部」及び学部長を責任者とする「学力検査場本部」を設置することで、責任ある組織体制を整備している。また、各入試選抜制度に係る実施要項及び留意事項等を作成し、明確化された手続のもと適切かつ公正に入学者選抜を行っている（評価の視点 4-4）。

山口大学

山口大学では、入学者選抜の基本方針及び各入学試験で重視するポイントを追加したより具体的な学生の受け入れ方針を新たに策定し、2026 年度入学者選抜から適用する予定としている（評価の視点 4-1）。

適切な能力・適性を備えた入学者を受け入れるために、学力の 3 要素を踏まえて評価する入試として、一般選抜（前期・後期）、学校推薦型選抜Ⅱを実施している。一般選抜（前期）では、個別学力検査により知識・技能の学力を、一般選抜（後期）及び学校推薦型選抜Ⅱでは、面接試験により人間性・主体的に学習に取り組む態度・協働性を、学校推薦型選抜Ⅱでは、小論文試験により思考力・判断力・表現力を測っている。上記全ての入試制度において大学入学共通テストを課すことで、入学者の基礎学力を担保している。また、私費外国人留学生を対象とした入試制度を導入し、多様な人材に修学の機会を与えている（評価の視点 4-2）。

入学者選抜の実施にあたっては、「山口大学入試委員会規則」に基づき「入試委員会」を設けるとともに、「山口大学入学者選抜実施規則」に基づき、当該大学に「実施本部」を、各学部「試験場本部」を置いている。「実施本部」は、実施本部長（学長）、実施副本部長（教育学生担当副学長）及び実施本部要員（実施副本部長が指名する者）を、「試験場本部」は、試験場本部長（学部長）、試験場副本部長（山口大学入試委員会委員のうち試験場本部長が指名する教授）及び試験場本部要員（試験場本部長が指名する者）をもって組織され、明確な責任ある組織体制を整えている。また、「山口大学入学者選抜実施要項」で明確化された手続のもと適切かつ公正に入学者選抜を行っている（評価の視点 4-4）。

【項目：定員管理】

共通

過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均及び収容定員に対する在籍学生数比率は、山口大学ではそれぞれ 1.05 及び 1.08 であり、鹿児島大学ではそれぞれ

1.03 及び 1.05 であることから、入学者数及び在籍学生数を適正に管理している（評価の視点 4-5）。

鹿児島大学

特記事項なし

山口大学

特記事項なし

【項目：学生支援】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学において、学生生活に関する相談・支援体制として、修学・健康・就職・ハラスメント等、各種の相談窓口を設置し人員を配置している。また、ハラスメント防止のための規則や指針を定め、広報・啓発活動を行っている（評価の視点 4-6）。

学生の自主的学習を支援するために、学生の自習室やスキルスラボ、授業支援システム「Glexa」を整備し、成績不振者には教員による助言・指導を実施している。さらに、留学生支援や経済的支援として、チューター制度や奨学金、授業料免除制度を提供している（評価の視点 4-7、4-8）。

キャリア支援としては、専任教員が就職相談や進路支援を行う全学的な支援に加え、学部においても就職担当教員を置き、相談・指導を行っている。3年次に開講している「獣医キャリア形成論」では学外の獣医師を講師として招き、ロールモデルをイメージさせている。また、鹿児島大学・宮崎大学・山口大学で協力して合同就職説明会を開催し、キャリア形成に関する相談及び支援を行っている（評価の視点 4-9）。

鹿児島大学

修学・学資・健康・就職・課外活動・ハラスメントを含む学生生活全般に対する相談・支援体制として、学部にはクラス担任教員及び所属研究室の指導教員に加え、ハラスメント相談員を配置している。また、相談窓口として「学生何でも相談室」のほか、「保健管理センター」「障害学生支援センター」が大学に整備されている。さらに、ハラスメント等防止のための規則及び指針を定め、リーフレットによる広報・啓発活動を実施している（評価の視点 4-6）。

学生の自主的な学習を促進させるための取組みとして、スキルスラボを整備しているほか、学生自習室に設けたパソコンを通じて講義動画を視聴できるようにしており、授業の復習に活用されている。GPAを基準とした成績不振者に対しては、各学期末にクラス担任教員による助言・指導を行っている（評価の視点 4-7）。

つまずきを感じている学生や障がいをもつ学生のほか、保護者や担当教員から修学に関わる相談に応じる窓口として、「障害学生支援センター」が設置されている。また、留学生を支援する学部学生によるチューター制度を設けるとともに、「鹿児島大学グローバルセンター」では留学生に対する日本語、日本文化・異文化理解教育、生活・学習支援を行っている。経済的な事情により学修が困難となった学生に対しては、相談窓口として学生部学生生活課、学務課、学生生活委員（教員）が対応できるようにしており、授業料免除や奨学金等の経済的支援制度も設けている（評価の視点4-8）。

「キャリア形成支援センター」では、専任の教員・スタッフ・相談員による就職に関する相談や情報提供を行っている。学部では6年次生担任が就職指導担当教員として配置され、学部6年次生に対して進路調査を3か月ごとに実施し、進路支援に役立てている。求人情報を含む就職・キャリアに関する情報はウェブサイトを通じて配信している（評価の視点4-9）。

山口大学

学生生活に関する相談・支援体制として、①「健康科学センター」、②「学生相談所」、③「学生特別支援室」、④「学生生活なんでも相談窓口」を設けているほか、学部では修学指導担当教員、学務委員及び学務係も相談に応じており、学生自らが相談しやすい窓口を選んで相談できる体制を整えている。なお、上記②、③、④を置いている「学生支援センター」のウェブサイトでは、学生生活支援全般について詳細に記載された「学生生活の手引き」を配信している。また、ハラスメントに関する相談・支援体制として、ハラスメント防止のための規則及びガイドラインを定め、各部局から選出され、学長が任命した相談員に加えて、上記①、②においても相談できる体制を整えているほか、学内に設置された「ハラスメント防止・対策委員会」が作成したリーフレットによる広報・啓発活動を行っている（評価の視点4-6）。

学生の自主的な学習の場として、クリニカル・スキルスラボ及び獣医図書室を設置し、授業外学習の促進と学習効果の向上を図っている。スキルスラボでは、臨床技術の修得や疾患の診断・治療に係るシミュレーションの自習ができる環境としている。獣医図書室では、録画講義閲覧端末を備えており、授業の復習に活用できるようにしている。

また、「修学指導に関する取扱い要領（共同獣医学部）」を定め、修学、学生生活等の問題を抱えた学生を早期に発見し、対象学生と面談を実施することで改善を図り、標準修業年限内で卒業させることを目指した取組みを行っている（評価の視点4-7）。

学生特別支援室（SSR）では、障がい等の理由から修学に困難を抱える学生の相談に応じるとともに、学生、学部教員、授業担当教員、その他の関係部署と連携を図って、必要な修学支援を実施又は調整している。「留学生センター」では、留学生に

対して日本語授業を開講するほか、チューター及び留学生アドバイザーによる修学面・生活面のサポートを行っている。「ダイバーシティ推進室」では、「山口大学における多様な性的指向と性自認（SOGI）を尊重する基本理念と対応ガイドライン」を策定し、SOGIに関する悩みに配慮し、積極的に支援する仕組みを構築している。また、経済的な支援として、授業料免除や奨学金制度を設けている（評価の視点 4-8）。

「キャリアセンター」では、学部学生から大学院学生まで一貫したキャリア形成支援を行う組織として、全学的なキャリア教育・就職支援を行っている。学部では、就職担当教員を配置し、研究室の指導教員と共に求人情報の提供や就職相談等を行っている。求人情報を含む就職・キャリアに関する情報は、ウェブサイトや就職情報室で提供している（評価の視点 4-9）。

5 教員・教員組織

<概 評>

【項目：教員組織の編制】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学の教員組織の編制方針に基づき、獣医学教育モデル・コア・カリキュラム及び教員の専門性に配慮して、基礎から臨床にかけてバランスのとれた教員組織を編制し、多様な分野で学生に幅広い知識と技術を提供している。また、コア科目の大部分及びアドバンスト科目の全てを基幹教員が担当している（評価の視点 5-1～5-3）。

両大学合わせた学生定員は1学年につき計60名で、教育組織の教員数は82名であることから、学生定員に対して必要な獣医学に関わる教育組織の教員数を満たしている（評価の視点 5-4）。

また、若手教員の積極的な採用や女性・外国人教員の比率向上にも取り組んでおり、持続可能性や多様性の確保に努めているものの、女性教員比率については改善の余地がある。前回の評価結果でも指摘しているが、引き続き対応が望まれる（評価の視点 5-5）。

研究に関しては、人獣共通感染症分野、人と動物の福祉、伴侶動物のがんの革新的治療法、安全な畜産物の安定的な供給に資する研究を行っており、学内外で評価を受けている。また、これらの研究の方法論や実験技術を4年次必修科目である「専攻演習」において解説することで、各分野における最新の知見について理解を深めるとともに、実験手技を修得するなど、学生への教育にも生かしている（評価の視点 5-6）。

教員公募・採用は、規定に基づき行われ、透明性・適切性を担保している。さらに、教育研究活動を活性化させる取組みとして、教員の公募制のほか、一部職種において任期制が導入されている（評価の視点 5-7）。

鹿児島大学

教員組織の編制方針として、基本的には教育課程全体に占める各学科目の割合に応じて教員数を設定するとともに、両大学に同じ教育研究分野がある科目で、同分野における新規の人事案件が発生した場合には、不足している他の教育研究分野に教員数を割り当てることとしている。また、参加型臨床実習の負担割合が大きく、臨床系科目として多くのアドバンスト科目が設定されたことに伴い、臨床獣医学講座（動物病院含む）の教員数を多く配置している。

教員に求める能力・資質に関して、共同獣医学部の教員には、最新の教材を効果的に活用し、幅広く高度な獣医学教育を提供する能力を求めている。そのための採用基準として、まず獣医師免許と博士号を有する教員の採用を目指している。また、「鹿児島大学教員の資格に関する規則」において教員の選考基準を示している。このよう

に、獣医学教育（学士課程）を支える教員組織の編制方針を策定し、教員に求める能力・資質の設定（選考基準）を適切に明示している（評価の視点 5-1）。

2024年5月1日現在、共同獣医学部教員として教授18名、准教授13名、助教14名が属しており、教授がやや多くなっているが、各職階を占める人数が大講座単位において均一となるよう努めている。また、各分野に配置されている教員の割合は、いずれの分野においても適正な範囲内となっている。参加型臨床実習については、臨床獣医学講座及び動物病院に所属する教員が主に担当しているが、これら教員は、獣医師免許を有していることはもちろんのこと、動物病院又は各診療施設における十分な臨床経験を有していることを条件に採用している。したがって、参加型臨床実習の実施に対する教員配置については、十分配慮されたものとなっている。このように教員組織の編制方針に基づき、教育研究活動の実施に必要な教員を分野ごとに適正に配置しているといえる（評価の視点 5-2）。

コア科目及びアドバンスト科目の担当者は、いずれも各科目に関連する分野における研究業績や専門的な知識や技術を有しており、適材適所な人員配置となっている（評価の視点 5-3）。

2024年5月現在の専任教員における女性教員の割合は13.3%で、学部で定める目標値及び本協会の獣医学教育評価で定めている適正な割合には達していない。現在の取組みとして、共同獣医学部において新たな人事案件が生じた際には、女性限定又は優先した公募を行っている。

外国人教員については、基幹教員と同等の立場で、共同獣医学研究科に所属している特任准教授（1名）が、鹿児島大学の学部学生に対する英語教育も担当している。教員の年齢構成については、60歳以上が17.8%、50～59歳が28.9%、40～49歳が37.8%、30～39歳が13.3%、29歳以下が2.2%となっており、40歳未満の比率が低い。専任教員の獣医師免許保有率は88.9%であり、高い獣医師免許保有率を有する教員組織が構成されている。年齢構成の是正のため、基本的には若手教員の採用を多く行っているとしているが、外国人教員の比率の向上とあわせ、更なる対応が期待される（評価の視点 5-5）。

鹿児島大学は、地域社会の課題解決につながる研究を主体としており、主に国内外島嶼地域における野生動物や希少種保全に関する調査研究及び食肉生産に係る動物衛生分野に関する研究が行われている。また、先進的感染制御、特に人獣共通感染症分野において、「TADセンター」が参画して国際水準の卓越した研究に取り組んでいる。これらの研究活動は、査読のある国際的な科学論文雑誌への掲載という形で評価されるとともに、共同獣医学部から発信された研究成果については、全学的かつ全国的にも大学の運営費交付金に直結するような査定を受けている（評価の視点 5-6）。

教員選考は、「鹿児島大学憲章」等に沿って、学長のリーダーシップのもと、全学的な視点で柔軟かつ機動的に行うこととしている。教員の任用に関しては、「鹿児島

大学教員の選考に関する規則」に基づき進められている。学術研究院に所属する教授、准教授、講師、助教及び助手の資格に関しては、「鹿児島大学教員の資格に関する規則」に定められ、学系における実際の教員の選考は、「鹿児島大学獣医学系教員選考規則」に基づき実施している。教員の選考は「学系会議」で行っており、同会議は教員の選考を行う必要が生じた場合、速やかに「選考委員会」を設置するとしている。

「選考委員会」は、公募原案を作成し、「学系会議」の承認を得て、候補者の公募を行う。「選考委員会」は、候補適任者2名以内を選定し、「学系会議」が候補適任者について審議し、必要に応じて候補適任者の面接審査を行う。基幹教員及び特任教員両者の選考においては、規則の定めに従って原則として公募制により候補者を募集している。特任教員については基本的に任期制であり、教員の研究教育活動の活性化に努めている。現在基幹教員は任期制ではないが、今後基幹教員にも適用可能であるか検討予定としている。このように、教員の募集・採用・昇任について、現時点では適切に実施されているといえる（評価の視点5-7）。

山口大学

国際水準の獣医学教育を実施するため、鹿児島大学と連携し、両大学間で相互補完型の教員配置を行っている。教育課程との連動や、教育研究を推進するうえで必要となる具体的な教員の配置については、学部執行部で構成される「戦略会議」において検討され、専門分野のバランス、人件費、職位等を考慮したうえで学部長が人事計画（案）を作成し、教授会での議論を経て全学の「人事委員会」に承認を得て教員人事を行っている。教員の配置については、獣医学モデル・コア・カリキュラムにおける各分野の科目に対応する形で研究室を構成し、それぞれの研究室の教育負担に応じて適切に教員を配置している。教員に求める能力・資質については、「国立大学法人山口大学大学教育職員選考に関する基本指針」「国立大学法人山口大学大学教育職員選考基準」及び「山口大学共同獣医学部大学教育職員選考内規」に基づき、博士の学位を取得している（助教については1年以内に取得見込みを含む。）こと、職位に応じた著書及び学術論文（査読付き）の数をクリアすることを求めている。なお、臨床系の教員では、獣医師免許を取得し臨床の実務経験を職位に応じて十分に有していることも求めており、教員に求める能力・資質は適切に設定されている。なお、持続可能性や多様性に配慮した教員組織の編制にあたっては、学長主導のもと、教員の戦略的・機動的な人員配置を目指すため、毎年度「教員人事の基本方針」を定めている（評価の視点5-1）。

職位ごとの比率は、全学的な方針として示されている「教授：准教授：講師以下」＝「1：1：1」を目指している。これらの方針に基づき教員を配置することで、2024年5月1日現在において「教授：准教授：講師以下」＝「1.4：1.3：1」となっている。やや講師以下が少ない傾向にあるため、当該大学が掲げる目標に向けて講師及び

助教の増員が望まれる。2024年5月1日現在における各分野に配置されている教員の割合については、適正な範囲となっている。

総合参加型臨床実習については、臨床獣医学講座の教員及び「動物医療センター」の教員を配置しているが、獣医師免許を取得しており、臨床の実務経験を職位に応じて十分に有している者を審査のうえ採用している。総合参加型臨床実習に必要な資質を持つ教員の配置は適切に行われているといえる（評価の視点5-2）。

コア科目・アドバンスト科目いずれも、専任教員（基幹教員）は「山口大学共同獣医学部専任大学教育職員選考内規」に基づき審査を受け、教授会等の議を経て採用されている。また、兼任教員についても、教育研究実績・実務経験等を考慮し、教授会等の議を経て採用されており、適切に人員配置が行われているといえる（評価の視点5-3）。

女性教員の占める割合は13.5%であり、本協会の獣医学教育評価で定めている適正な割合には達していない。外国人教員の占める割合（外国人教員数／共同獣医学部全専任教員数）は2024年4月時点で2.7%であり、学部として積極的に登用を進めているところである。年齢構成に関しては、山口大学では2022年度に「大学教育職員の『中長期的に目指すべき理想の年代構成』について」を定め、理想の年代構成として、49歳以下：50歳以上を1：1、当該学部は49歳以下：50歳以上を1.47：1（22名：15名）とすることのほか、40歳未満の若手研究者の割合を全学では22%以上、当該学部は21.6%とすることを掲げている。現在、若手研究者の割合が基準よりわずかに低い値となっているため、当該大学の掲げる目標の達成に向けて努められたい。獣医師免許保有者は、共同獣医学部専任教員37名中33名であり、免許保有率89.2%となっている。

これら持続可能性や多様性に配慮した教員組織の編制にあたっては、前述した「教員人事の基本方針」に基づき、教員退職後の後任補充人事については、下位の職位での「女性限定」「若手研究者」による公募を行い、多様性にも配慮し優秀な人材であれば国籍は問わない採用を行う予定である（評価の視点5-5）。

研究に関する考え方は、山口大学憲章に基づき策定した「明日の山口大学ビジョン2030」の「研究ビジョン」において、総合大学の強みを生かし、地域と共に課題解決に向けた共創システムの構築、世界をリードする研究領域の創造、価値創造の厳選となる学際的基礎研究を推進するとしており、当該共同獣医学部もこれに則り、研究を推進している。なかでも特徴的なものとして、「One Welfare 国際研究センター」で行うホース・アシステッドセラピー等の動物介在活動、法獣医学に関する教育研究等、全国に先駆けて推進しているワンウェルフェア研究のほか、「細胞デザイン医科学研究所」で行う最先端の細胞デザイン技術及びゲノム編集によるがんや遺伝病の革新的治療法の開発が挙げられる。研究成果は学術論文として、国際的に評価の高い査読付き学術雑誌へ掲載されるとともに、各種メディアへ取り上げられており、大型の競

争的資金を獲得するほか、学内予算配分において配慮されているとしている。また、「国立大学法人山口大学における戦略的教授昇任制度に関する要項」に基づき、学長から選考され、優れた研究成果を上げた若手教員が教授に昇任するなどの評価を受けている（評価の視点 5-6）。

国立大学法人山口大学に勤務する職員（契約教育職員、非常勤職員等を除く）の就業に関しては、「国立大学法人山口大学職員就業規則」に定められており、任免に関する手続（教員の意に反する降任を含む）は「国立大学法人山口大学職員任免規則」に、懲戒に関する手続は「国立大学法人山口大学職員の懲戒等に関する規則」において別に規定されている。教員の採用並びに昇任のための選考は、「国立大学法人山口大学教育職員選考基準」により、教授会等の意見を聴いて学長が行うこととしており、選考基準が定められているが、各分野の特性又は実情に応じ、各学部等が別に具体的な基準を定めるものとされている。この規定に基づき、「山口大学共同獣医学部専任大学教育職員選考内規」を制定して、共同獣医学部における教員の選考（採用・昇任）は、書類選考を基本として必要に応じ講演会、面接、模擬授業等により行うことを定めている。候補者による講演会等の開催後、教授会において適任候補者の採用に係る可否投票（無記名投票）が実施される。この結果は「人事委員会」に報告され、承認が得られれば採用あるいは昇任となる。なお、教員の選考は、「国立大学法人山口大学大学教育職員選考に関する基本方針」（非公表）において、採用人事は原則公募を行うこととしている。

教員の活動を活性化させる仕組みとして、教員の任期制が導入されており、「国立大学法人山口大学における大学教育職員等の任期に関する規則」及び「国立大学法人山口大学における大学教育職員等の任期に関する取扱要項」において、共同獣医学部では、助教の職の任期を5年とし、1回に限り再任を可としている。くわえて、テニユアトラック制も導入しており、「山口大学共同獣医学部におけるテニユアトラック制の実施に関する要項」を定めている。教員の活動を活性化させるその他の仕組みとして、上述の戦略的教授昇任制度が挙げられる。優秀な若手教員が、部局の昇任人事計画よりも早期に教授となり、安定的に研究に専念できる機会を与えることを目的としている（評価の視点 5-7）。

【項目：教員の資質向上等】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学において教職員の資質向上を図るための体制が整備されており、これに基づき、ファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）活動等を組織的かつ定期的に行っている。具体的には、共同獣医学部の強みを生かし、両大学の合同FD研修会を開催し、教育改善の専門家による基調講演に加え、基礎・病態・臨床の各分野において両大学の教員によるワークショップを実施

しており、教育内容・方法の改善に資するものとなっている。そのほか、教育力向上を目指したセミナーを定期的に相互に配信することに加え、講義や実習の相互参観を行っており、積極的に教員の資質向上を図るための体制を整備している（評価の視点 5-8）。

また、教員の講義負担・実習負担について適切に把握するとともに、各教員が自身の教育研究活動等について自己点検・評価を行い、これを学部として評価するシステムも確立している（評価の視点 5-9）。

鹿児島大学

全学レベルの研修として鹿児島大学では、「FD・SD合同フォーラム」、学生・職員ワークショップ、新入職員レクチャーを実施している。学部レベルでは、2014年度以降に学部内FD委員会が主体となって、年4回の獣医学セミナー、年2回のKUVTHセミナー（KUVTH：Kagoshima University Veterinary Teaching Hospital）、年2回のTAD研究センターセミナーを開催している。このように教育内容・方法等の改善を目的とした研修を組織的に行う体制を整備しており、活動実績も上げていることから、教員の資質向上を図るための体制を整備し、組織的な研修及び研究を定期的に実施しているといえる（評価の視点 5-8）。

教育研究活動における自己点検・評価については、年1回、各教員より提出された「獣医学系教員評価自己申告シート」に基づき教員個人の総合点を算出し、講座単位かつ職階による順位づけを行うことにより行っている（評価の視点 5-9）。

山口大学

教育・学生支援に関する施策を総合的に推進するため「教学マネジメント室」を設置し、文部科学省中央教育審議会大学分科会の教学マネジメント指針に沿って、教職員の教学マネジメント能力の向上及び教育改善に係る活動を行っており、「山口大学教学マネジメントガイドライン」に基づき、毎年度「全学FD・SD講演会」「大学マネジメントセミナー」等をはじめとする教職員向けの研修会のほか、TA・SAを対象とした研修会を開催している。そのほか、「共同獣医学部学術研究推進委員会」及び「動物医療センター」が主体となり、当該学科の教員による教育力向上のための獣医学セミナー、学外講師による獣医学特別セミナーや、外部講師及び学内臨床系講師による、教員、学生及び学外獣医師を対象とする総合臨床セミナーを開催している（評価の視点 5-8）。

教員は、毎年度初めに前年度の教育・研究・大学の管理運営・社会活動・診療（診療活動が加わる教員のみ）の状況を点検・評価して、「業績評価票」を作成し提出している。各教員の「業績評価票」の内容は、教員業績管理システムも参照のうえ、講義負担・実習負担の状況、教育研究活動（外部資金獲得状況を含む）、学内・学部内

委員の担当状況、社会活動を把握し、業績評価委員会において第一次評価を行う。この結果に基づき学部長が最終評価を行い、各教員へ返却している（評価の視点 5-9）。

< 提 言 >

○検討課題

共通

- 1) 前回の評価結果で指摘しているが、未だ女性教員比率が低い点について改善の余地がある。新たな人事案件が生じた場合には「女性限定公募」や「女性優先公募」という形態をとり、女性教員比率を高める努力はなされているものの、引き続き対応が望まれる（評価の視点 5-5）。

6 自己点検・評価

<概 評>

【項目：自己点検・評価】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学いずれも全学的に自己点検・評価に係る方針を策定し、責任体制を明確にしたうえで、組織レベル・個人レベルでの自己点検・評価のための体制を構築して、研究活動及び研究活動に裏付けられた教育活動の自己点検・評価を定期的実施しており適切である。

また、両大学において、各学年から2名ずつ選出された計12名の学生からなる組織（鹿児島大学：学生協議会、山口大学：獣医学生会議）を設置し、学生が各種委員会に出席することで、学生参画による意見反映及び自己点検・評価を行い、機能させている点は、特色として評価できる。

くわえて、第三者評価としては、国立大学法人評価、機関別認証評価のほか、2018年度には本協会の獣医学教育評価を受審し、日本における共同学部（共同教育課程）初の適合判定を取得した。さらに、2019年度には、国内のみならずアジアで初となるEAEVE認証を取得している。2022年度には中間報告書「EAEVE Interim Report 2022」を提出し、特段の指摘を受けることなく、認証を維持している。これらのEAEVE認証に関する取組みも特色として認められる。

なお、鹿児島大学の「獣医学教育改革室」は、2025年度のEAEVE再評価に向けた「自己評価報告書」の作成と共に、認証継続のための改善を進めている（評価の視点6-1～6-3）。

鹿児島大学

「国立大学法人鹿児島大学内部質保証に関する規則」において、組織の自己点検・評価は、①認証評価の基準に基づくもの及び②中期計画の進捗状況に関するものの2つについて、原則として毎年度実施することを明記しており、実施にあたっての詳細は「国立大学法人鹿児島大学における組織の自己点検・評価に関する実施要項」に定めている。

①認証評価の基準に基づく自己点検・評価に関しては、学部及び研究科では、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構が実施する機関別認証評価の大学評価基準のうち、領域6（教育課程と学習成果に関する基準）に定める評価の基準に基づき実施することとしている。ほかにも、新たに改善が必要と認められた事項及び外部評価又は第三者評価等の結果に基づき、自己点検・評価を実施することとしている。②中期計画の進捗状況に関しては、各中期計画を担当する推進責任者及び部局等責任者が、当該年度の行動計画及び評価指標の達成状況を評価するとともに、評価結果に応じて、次年度以降のロードマップ（各年度の行動計画）の見直しを行うことを定めてい

る。また、各年度の自己点検・評価の結果は、「自己点検・評価報告書」としてとりまとめ、公表することとしている。

これら規則及び実施要項に基づき、共同獣医学部では、機関別認証評価の大学評価基準のうち「教育課程と学習成果に関する基準」の項目について点検・評価を行っている。これに加え、本協会及びEAEVEによる第三者評価で指摘された事項に対する改善の取組みの進捗状況について数値データを交えて報告している。また、「学生協議会」を通じて学生の意見を反映できるようにしている。

本協会による獣医学教育評価及びEAEVEによる評価の結果に基づく行動計画の改善・見直しを弛まなく実施する体制を構築するために、専任教授（室長、常勤）1名と非常勤事務職員1名、兼務教員5名からなる「獣医学教育改革室」を設置し、外部評価システムの解析、「自己評価報告書」の作成、評価基準への対策や評価による指摘事項への改善策の検討等を行っている。

教員評価については、「学術研究院農水産獣医学域獣医学系教員の昇給実施要領」を定め、毎年度実施している。勤務成績判定のために、教育、研究、社会貢献、国際交流、管理・運営の5区分からなる自己評価項目を設け（全体評価の60%）、その他特記活動等として学部運営等の優れた活動、特別な功績、規則等違反、学部決定違反等を評価項目とする学系長評価（他己評価）を加えている（全体評価の40%）。各教員が年度実績を「獣医学系教員評価自己申告シート」に記入して評価者に送付し、それに学系長評価を加えた総点数が付される仕組みとなっており、学系長は、評点に基づき、職階ごとの順位づけを行い、昇給区分の判定資料としている。なお、着任後の各教員の教育研究活動を高めていくために、各職階に教員活動の到達目標（数値目標等）を定め、達成度評価を加えるなど、今後の評価方法の見直しを検討している。

第三者評価に関しては、国立大学法人評価、機関別認証評価、本協会の実施する獣医学教育評価、EAEVEによる欧州の獣医学教育評価、AAALAC Internationalによる動物実験に関する国際認証が挙げられる。法人評価では、EAEVE認証の取得や、「TADセンター」における、口蹄疫、高病原性鳥インフルエンザのようなTAD病原体又は重症熱性血小板減少症候群（SFTS）や狂犬病等の制御に向けた研究が、高評価を受けている。2021年度の機関別認証評価においても、優れた点として、EAEVE認証の取得により、教育内容の体系性や教育の質保証への取組み等が、国際水準であることが確認されたことが挙げられた。

さらに、動物実験施設に関する国際認証として、鹿児島大学共同獣医学部の附属総合動物実験施設が、2017年6月からAAALAC International認証を取得している。認証の継続にあたっては、動物の使用に関する有害事象の評価と報告の手順及び非医薬品グレードの麻酔薬（ペントバルビタール）の使用に関する審査体制の確立について対応策をまとめ、AAALAC Internationalに報告した。その結果2024年11月付で完全認証を継続している（評価の視点6-1～6-3）。

山口大学

全学における組織レベルの自己点検・評価に関しては、「山口大学における自己点検・評価に関する基本方針」を策定し、教育研究活動等について定期的・継続的に自己点検・評価し、自主的・自律的な質保証の取組みにより質の向上を図り、その公表を通じて、社会への説明責任を果たすことを目的とすることを明示している。同方針に加えて、「山口大学における教育の内部質保証に関する要綱」を定め、学長を統括責任者とし、自己点検・評価責任者として副学長（大学評価担当）を充て、「国立大学法人山口大学評価委員会」（以下「評価委員会」という。）が中核となる体制を構築している。また、中期計画や「明日の山口大学ビジョン 2030」を実現するための主要施策の進捗管理を担当副学長のもとで行うなど、役割と責任を明確にしている。なかでも、教育の内部質保証は、教育課程、学生支援、学生の受け入れ、教職課程、教育施設及び教育設備の区分により実施することとし、それぞれを担当する推進責任者（「推進責任者」：教育学生・財務施設・学術基盤・情報化推進担当の各副学長）と各所掌の委員会を紐づけている。教育課程責任者として各学部長・研究科長を充て、推進責任者と連携し、各教育課程における教育の内部質保証について、毎年度必要な活動を行っている。

共同獣医学部における組織レベルでの自己点検・評価については、「獣医学教育評価室」を設置し、学部の教務・学生関係の責任者である学務委員会委員長（教育研究評議会評議員）、副学部長、学科長、「獣医学生会議」のメンバー（各学年から2名ずつ選出）のほか、学部長が必要と認めた者をもって組織して、「山口大学における教育の内部質保証に関する要綱」に基づき行っている。

自己点検・評価の実施にあたっては、原則として客観的なデータに基づき行うものとし、第三者等の外部からの意見を活用するとともに、関係者（学生・卒業生（修了生）・教職員等）からの意見を聴取し、活用している。具体的には、「山口大学共同獣医学部獣医学教育改革推進連携協議会」を設置し、学外実習協力機関の代表者や学生から意見を聴取しているほか、「山口大学共同獣医学部教育評価室会議」において、学生と教員間とで意見交換を行っており、点検・評価に学生が積極的に参加している点は評価できる。

教員個人の自己点検・評価については、「山口大学憲章」のもと、教員等に明確かつ客観的な評価項目及び業績評価指標を示すことで、当該大学が目指し、教員等に期待する成果について共通理解を図り、その実現に向けての達成状況等を把握することを通じて実施している。また、評価結果を厳格かつ公正に給与に反映することを目的とし、「国立大学法人山口大学大学教育職員等業績評価実施要項」（非公表）及び「山口大学令和2年3月31日以前に年俸制を適用する職員業績評価実施要項」（非公表）に基づき、各部局で作成した「業績評価票」等を活用している。共同獣医学部におい

ては、学科長、生体機能学・病態制御学・臨床獣医学の各講座より学部長から指名された教授各1名から構成される「業績評価委員会」（委員長・共同獣医学科長）が所掌している。各教員は、毎年度初めに、前年度の教育・研究・大学の管理運営・社会活動・診療活動の各項目に係る点検・評価を実施し、「業績評価票」を作成し学部長へ提出している。各教員から提出された「業績評価票」は、まず「業績評価委員会」において内容を「教員業績管理システム」も参照のうえ、第一次評価を実施し、この結果に基づき学部長が最終評価を行い、各教員へ評価区分を通知したうえで、給与へ反映している。

第三者評価に関しては、国立大学法人評価のほか、機関別認証評価、本協会の獣医学教育評価、EAEVEの獣医学教育評価を受けている。特筆すべき点として、国立大学法人評価において、共同獣医学部の研究活動状況及び研究成果の状況が共に高い質にあると判定され、SFTS（重症熱性血小板減少症候群）に関する研究が特色ある点として評価されるとともに、「動物由来感染症の病態解析並びに診断・予防・治療法の開発」は、学術的にも社会・経済・文化的にも卓越している研究業績とされたことが挙げられる。くわえて、2022年度の機関別認証評価において、優れた点として、EAEVEによる国際認証の取得を目指し、同機関が求める畜産教育や獣医公衆衛生教育を強化するカリキュラムの改編を2016年度及び2017年度に行っていること、2019年度にEAEVEにより欧州水準の獣医学教育課程であることの認証を得ていることが評価されている（評価の視点6-1～6-3）。

【項目：結果に基づく教育研究活動の改善・向上】

共通

当該獣医学教育課程では、両大学において、獣医学教育の質向上を目的に、自己点検・評価及び第三者評価の結果をもとに改善を進めている。例えば、本協会の獣医学教育評価において、両大学相互乗り入れの点検・評価体制の構築を求められたことを受けて、「共同獣医学部協議会」のもとに「評価ワーキンググループ（WG）」を設置し、同WGを中心に改善に取り組み、2022年度には「改善報告書」を提出した。その結果、シラバスチェックシステム、成績評価の厳格化、TA等の確保及び女性教員比率の増加が、引き続き検討課題とされたことから、改善に向けた取組みを継続している。

EAEVEによる評価報告書では、山口大学共同獣医学部の懸念事項として、①馬臨床施設が最適ではない、②産業動物隔離施設が最適ではない、両大学共同獣医学部の懸念事項として、馬のハンズオン訓練と伴侶動物患者の一次診療が最適でないことが指摘された。また、改善に向けた提案事項として、両大学の組織における関係者と学生の参加の強化、活動・施設・特性を更に共有した両校の協同活動の強化、二校間の学習プログラムと臨床記録システムの協調、基礎科学分野のサポートスタッフ

増員、J VMAによる専門医制度の実施が挙げられた。これらに対し、鹿児島大学共同獣医学部では「獣医学教育改革室」が、山口大学共同獣医学部においては「獣医学教育評価室」が、それぞれ中心となって改善に取り組んでいる。以上のことから、評価結果をもとに、適切に改善のための計画を策定し、実行しているといえる（評価の視点 6-4）。

鹿児島大学

E A E V E 認証取得の過程で、臨床教育及び公衆衛生教育の大幅な改善・改革として、総合参加型臨床実習の充実を図っている。具体的には、獣医療が対象とする全ての動物種に対応し、学生1人あたり年間32週間以上の実習時間を斉一教育科目として確保しており、特に、実習機会の少ない、豚・鶏・水産動物・展示動物についても産学官連携による少人数現地実習を実現している。また、農業共済組合家畜診療所のみならず、家畜保健衛生所、食肉検査所、養豚農場、養鶏農場、養殖場における獣医師業務を全ての学生が現地で学べるようにしており、家畜保健衛生所や食肉衛生検査所等では滞在型の現地実習を行っている。これらの取組みを継続して、積極的かつ精力的に実施していることは高く評価できる。また、2019年度のE A E V Eによる評価では、共同獣医学部の懸念事項として、馬の一次診療の臨床ハンズオン訓練が準最適であることが指摘され、教材となる症例の更なる増数が求められた。これら懸念事項については、その後、学部のみならず全学的な自己点検・評価項目として共有し、各年度の数値データに基づきながら改善に取り組み、課題は解消されている。

E A E V Eによる評価受審のために作成した「自己評価報告書」には、「共同教育を構成する2大学は地域特性を踏まえた高度な獣医学教育研究のプラットフォームの構築を計画していること、その中でも鹿児島大学共同獣医学部は、畜産・野生動物施設の整備を将来構想として定めること」を記載した。認証取得後は、鹿児島大学共同獣医学部では、強みである産業動物臨床獣医学と動物衛生学を中心とした産業動物獣医学の教育研究の更なる強化に取り組み、国内屈指の畜産地帯である鹿児島県曽於市及び関連の畜産企業との連携により「南九州畜産獣医学拠点」の整備を構想して、2023年度に教員組織である「SKLVセンター」を設置し、2024年度に当該拠点における全国の獣医学部生と畜産技術者を受け入れた教育及び卒業研修（学び直し）を開始したことは高く評価できる。

さらに、動物福祉学教育を充実させることを構想して、鹿児島大学共同獣医学部に畜産学科を新設し、従来の畜産学教育に獣医学関連科目を加えて充実させ、愛玩動物看護師の受験資格取得も可能な教育プログラムを開設したことも特筆に値する。

このように、外部評価時に示した将来計画の実現に向けた取組みと、外部評価によって得られた指摘事項の改善・解消によって、共同獣医学部の教育研究活動の改善・向上に結びつけている点は評価できる（評価の視点 6-4）。

山口大学

評価の視点 6-1 及び 6-2 で述べたように、「山口大学における教育における内部質保証に関する要綱」に基づき自己点検・評価を実施し、各項目に対する達成状況の確認を行うとともに、組織的教育活動の改善・向上のための取組みについて「獣医学教育評価室」及び「共同獣医学部学務委員会」で検討を行い、「学務委員会」に報告のうえ実行に移している。特に共同教育課程に関する自己点検・評価は、「評価WG」において、鹿児島大学と調整を図りつつ実施し、改善に向けて取り組んでいる。その他、改善が求められる事項として指摘を受けた項目については、フォローアップ表を作成し計画的に改善を進め、改善報告書を提出している。改善報告書検討結果において更に一層の改善が求められることとして指摘を受けた事項についても、同様に改善を進めている。

また、2019 年に認証を取得した E A E V E の評価に関して指摘を受けた事項（①馬臨床施設が最適ではない、②産業動物隔離施設が最適ではない、③馬のハンズオン訓練と伴侶動物患者の一時診療が最適ではない（③のみ両大学共通事項））については、大学本部と協議・調整を進めながら改善を行い、2022 年度に中間評価を受け、2023 年 7 月に E A E V E から、順調に改善を進めており特段問題はない旨のレビューを受領した。このように、自己点検・評価及び第三者評価の結果に基づく当該獣医学教育組織の活動全般に関する改善・向上を図るための計画の策定と、その計画の実行が適切に行われていると評価できる（評価の視点 6-4）。

【項目：情報公開】

共通

当該獣医学教育課程は、両大学において、法令に定められた評価（国立大学法人評価、機関別認証評価）や外部評価（本協会、E A E V E）の結果を積極的にウェブサイト等に公開するとともに、学生や教職員、地域社会に広く周知している。また、ウェブサイト充実させ、最新の情報を掲載している。以上のとおり、教育情報の公表は適切で、社会に対する説明責任を果たしていると判断できる（評価の視点 6-5）。

鹿児島大学

大学の機関別認証評価、中期目標の達成状況に関する評価及び自己点検・評価の結果については、鹿児島大学ウェブサイトにおいて公表している。獣医学教育（学士課程）の外部評価結果（本協会、E A E V E、A A A L A C International）についても、特設ページを設け適切に公表している。また、鹿児島大学概要、共同獣医学部概要、履修の手引き、大学案内等への認証マークの掲載や説明文の記載を通じて、獣医学教育課程が本協会の適合判定及び E A E V E による認証取得のステータスを保有

し、それら外部評価基準／結果に基づいた教育システムの改善を遂行していることを、学生・教職員及び社会に対して広く周知しており、適切である（評価の視点 6-5）。

山口大学

大学の機関別認証評価、中期目標の達成状況に関する評価及び自己点検・評価の結果については、山口大学ウェブサイトの法定公開情報において、獣医学教育（学士課程）の外部評価結果（本協会、E A E V E）についても、山口大学共同獣医学部ウェブサイトそれぞれ特設ページを設置し、学生・教職員及び社会に対して広く外部に評価結果を公表している。山口大学案内、共同獣医学部ガイドブック、履修の手引にも多様な情報を掲載し、学部評価基準／結果に基づいた教育システムの改善を常に遂行していることを周知しており適切である。

また、共同獣医学部ウェブサイトの管理を行う職員を1名配置し、定期的に更新を行うことで、最新の情報を発信するなど適切に教育情報を公表している（評価の視点 6-5）。

< 提 言 >

○長 所

鹿児島大学

- 1) E A E V Eによる獣医学教育評価の認証取得の過程を通じて、臨床教育及び公衆衛生教育の大幅な改善・改革を行い、総合参加型臨床実習及び実地研修の充実を図っている。実習機会の少ない、豚・鶏・水産動物・展示動物についても産学官連携による少人数現地実習を実現している。また、家畜保健衛生所や食肉衛生検査所等における滞在型現地実習も行っており、これらを継続して、積極的かつ精力的に実施している点は高く評価できる（評価の視点 6-4）。
- 2) E A E V E認証取得後、産業動物臨床獣医学と動物衛生学を中心とした産業動物獣医学の教育研究の更なる強化に取り組み、国内屈指の畜産地帯である鹿児島県曾於市及び関連の畜産企業との連携により「南九州畜産獣医学拠点」の整備を構想して、「SKLVセンター」を設置し、全国の獣医学部学生と畜産技術者を受け入れた教育及び卒業後研修（学び直し）を開始したことは高く評価できる（評価の視点 6-4）。

○特 色

共通

- 1) 両大学において、各学年から2名ずつ選出された計12名の学生からなる組織（鹿児島大学：学生協議会、山口大学：獣医学生会議）を設置し、学生が各種

委員会に出席することで、学生参画による意見反映及び自己点検・評価を行い、機能させている点は、特色として評価できる（評価の視点 6-2）。

- 2) E A E V E の認証を取得・維持している点は、特色として評価できる（評価の視点 6-3）。

以 上